

高知県長岡郡本山町

松ノ木遺跡 V

2000.3

高知県長岡郡本山町教育委員会

松ノ木遺跡 V

2000.3

高知県長岡郡本山町教育委員会



空撮（上空より）

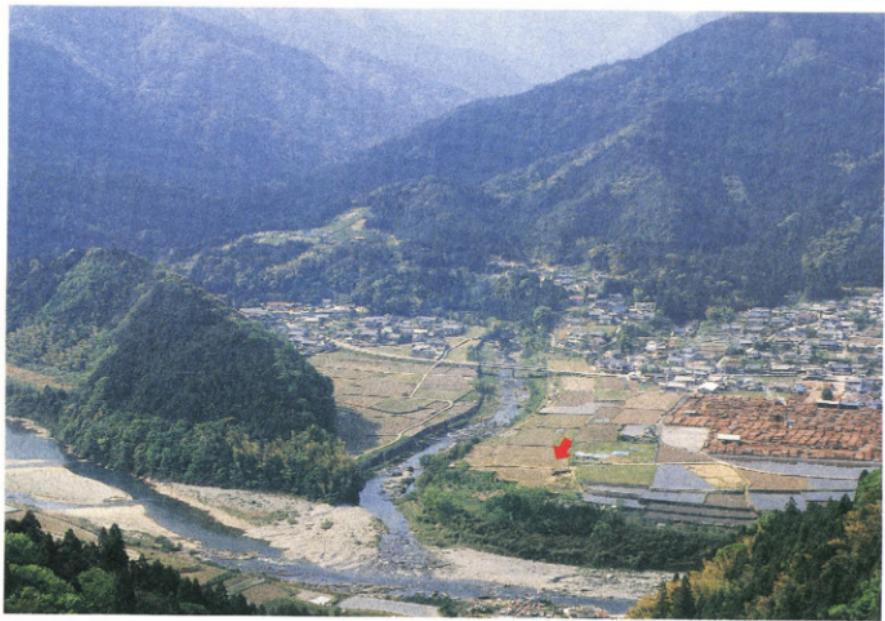
カラー写真 2



空撮(北より)



空撮(東より)



遠景(対岸南より)



土器捨て場完掘(東より)

カラー写真 4



北壁セクション



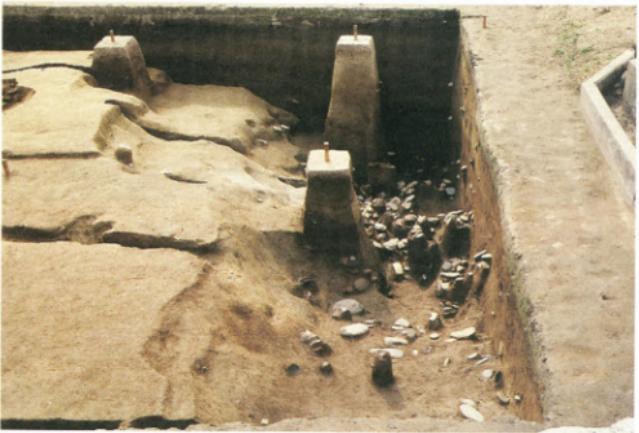
西壁セクション



東壁セクション



遺物出土状況
(東より)



遺物出土状況
(東より)



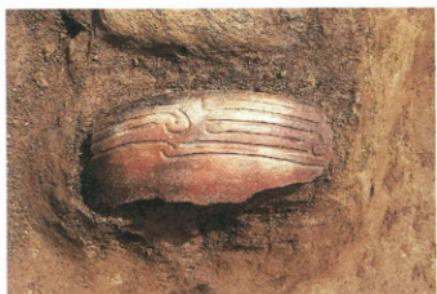
遺物出土状況
(東より)



3631



3123



3383



3441



3241



3140



3240



3232



3227



3227



3227



3227



縄文土器集合写真



縄文土器集合写真



3227



3631



3123



3089



3079



3441



3442



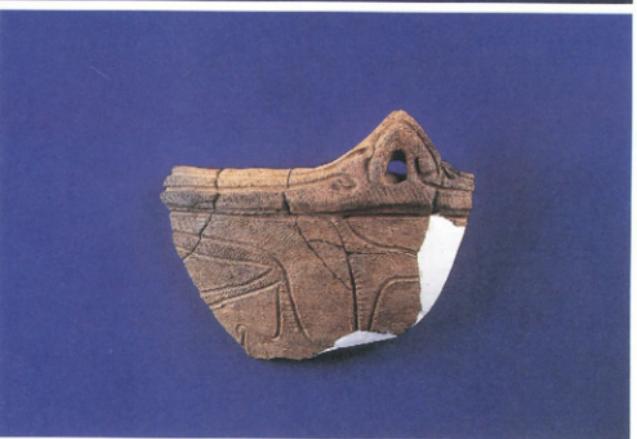
3359



3069



3153



3140



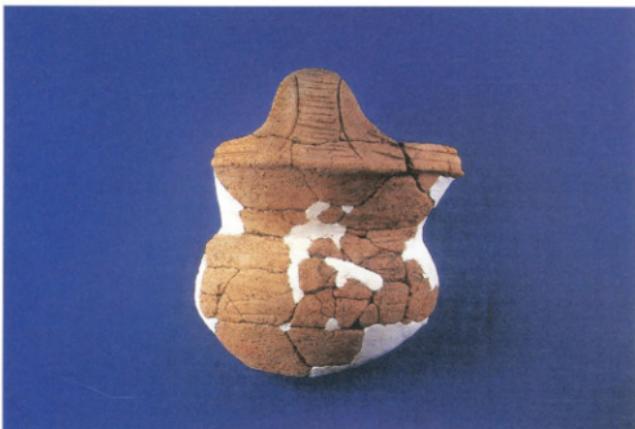
3046



3100



3128



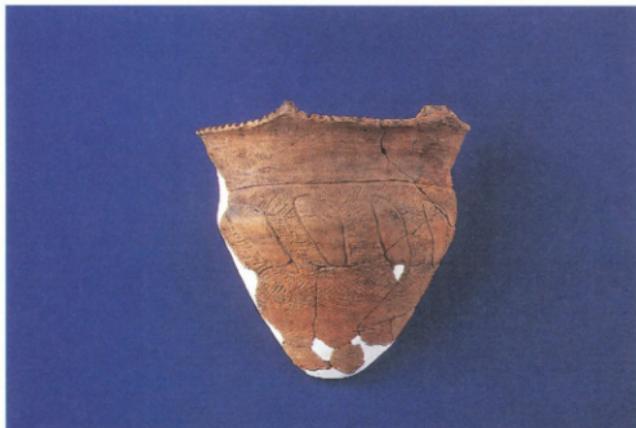
3139



3119



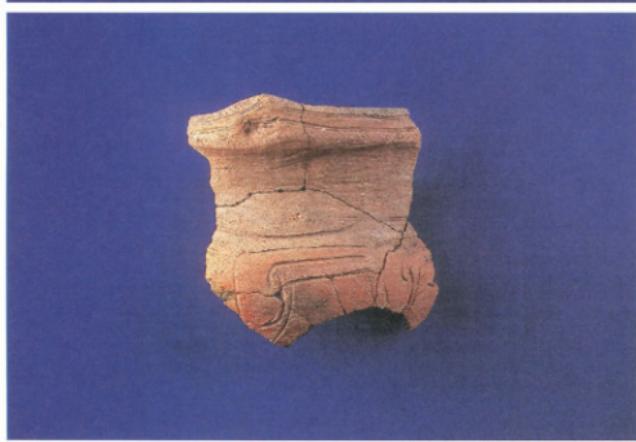
3096



3090



3240



3232



3239



3251



3267



3383



3382



446、447、
463



577、581、582、
578、579、580



石旗集合写真



342、343、344、
345、346、347、348



2区全景(西より)



4034



4033

序

埋蔵文化財は、土に埋もれたあるいは刻まれた過去の記憶で、私たちの祖先がその時代を懸命に生きた証です。

西日本屈指の縄文時代遺跡として脚光を浴びた松ノ木遺跡も平成二年からの五度の発掘調査により、全貌が明らかになりつつあります。

我が町より約六千年の歳月を経て姿を現した松ノ木遺跡は本町の縄文時代の形成を明らかにしただけではなく、瀬戸内と高知平野を結ぶ、交流の拠点として重要な働きをしてきた土地として、私たち現代人に感動と活気を与えてくれました。

今調査による貴重な成果は、歴史を解明していく上でかけがえのない文化遺産として活用され、失われつつある郷土の歴史・文化を未来に伝える一助となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで、ご指導・ご協力を賜りました高知県埋蔵文化財センターの諸職員方をはじめ関係諸機関、ならびに発掘調査・整理作業に従事していただきました方々に対し、心より厚く御礼申し上げます。

平成12年3月

高知県長岡郡本山町教育委員会
教育長 和田聖寛

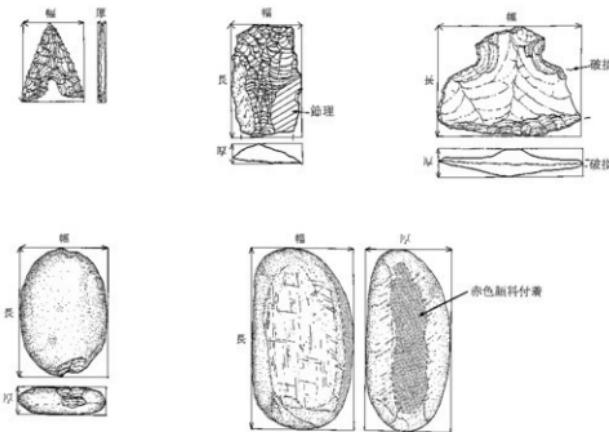
例　言

1. 本報告書は高知県長岡郡本山村寺家に所在する松ノ木遺跡の第5次発掘調査の報告書である。調査は平成6年度及び平成7年度と2ヶ年に亘り調査を継続したものの、第5次調査として報告する。
 2. 本調査は松ノ木遺跡の今後の保存対策のために国庫補助金の交付を受け、本山村教育委員会が実施した。発掘調査は平成6年度は平成6年11月28日(月)から平成7年3月31日(金)、平成7年度は平成7年4月3日(月)から平成7年5月10日(水)迄の93日間行った。整理作業は平成7年5月11日から平成12年3月31日迄の約5年間実施した。
 3. 発掘調査は(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター主任調査員前田光雄が担当した。事務全般は平成6年度右城誠、平成7年度吉岡泰志、平成8年度前田幸二、平成9・10・11年度渡邊徳仁が担当した。
 4. 本報告の編集は本山村教育委員会が行い、編集実務及び執筆については特に断りのない限り前田光雄が行った。
 5. 「第V章　自然科学分析」については魚島純一(徳島県立博物館)、和佐野喜久生、大塚豊揚(佐賀大学)、薬科哲男(京都大学)、藤原宏志(宮崎大学)、池谷勝典、太田公彦(株式会社アルカ)の各氏、また、(株)古環境研究所、パリノ・サーヴェイ株式会社にそれぞれお願いし、原稿を賜った。
- また吉野川流域で採集できる石錘等の石材については、標本作成しそれを高知大学理学部 中川昌治先生に鑑定をして頂いた。その標本を元に前田が石材鑑定を行っている。
- 弥生・古墳時代、中世の遺物については(財)高知県埋蔵文化財センターの諸学兄、学姉に教示を頂いた。感謝したい。
6. 発掘調査から整理作業において多くの方々、諸機関からの協力、御教授を賜り、本報告書を発刊することができた。ここでは逐一、芳名をあげないが感謝したい。

また発掘調査の便宜を与えていただいた地権者の川井定次、高石敏夫の両氏には心より感謝したい。
7. 発掘作業及び整理作業の参加者・協力者は以下の通りである。
- 発掘作業一石川真一郎、伊藤佐代子、今西和秀、今西小枝子、今西春子、小松和則、竹田瑞男、中野内愛子、樋口佳伯、村山志賀野、中山安キ
- 整理作業一〈遺物洗浄・注記・接合・補填〉井沢久未、門田美知子、竹村延子、松山真澄
　　〈遺物拓本〉井沢久未
　　〈土器実測・トレース〉井沢久未、西内宏美、山中美代子、山本裕美子
　　〈石器実測・トレース〉山中美代子、吉本由佳
　　〈遺構トレース〉井沢久未、小林貴美、山中美代子
8. 出土遺物の注記は平成6年度「94—25MM」、平成7年度「95—9MM」とした。遺物等の保管は本山村教育委員会が行っている。

凡 例

1. 石器凡例



2. 土器凡例



本文目次

卷頭カラー

序・例言・凡例

目次（本文目次・挿図目次・表目次・グラフ目次）

第Ⅰ章 遺跡の概要と調査経緯	1
第1節 調査成果の概説	
1 遺跡の内容	1
2 本報告の構成	
第2節 地理的環境	4
第3節 周辺の遺跡	6
1 嶺北地方の考古学的調査	
2 嶺北地方の遺跡内容	
旧石器時代／縄文時代／弥生・古墳時代／古代以降	
第4節 歴史的民俗的環境	12
1 古代駅家について	
2 中世の本山	
3 本山町の民俗	
第5節 松ノ木遺跡の各調査の概要	17
1 第1次調査	
2 第2次調査	
3 第3次調査	
4 第4次調査	
第6節 調査経緯	22
第7節 調査方法と発掘経過	23
1 調査方法	
調査区名／グリッド／発掘方法	
2 発掘経過	
3 整理方法	
第Ⅱ章 1区調査成果	27
第1節 縄文時代土器捨て場	27
1 署序	
2 遺物出土状況	
第2節 縄文土器	48
1 分類基準	
2 前期土器群	
3 中期土器群	
4 後期土器群	

深鉢/浅鉢/鉢/粗製深鉢/無文浅鉢/無文鉢/双耳壺/注口土器/壺/壺類/壺類底部/突起・把手類/底部/補修孔	
第3節 石器	188
1 石器出土状況	
2 各石器	
石鏃/石匙/抉入石器/石鏃/削器/楔形石器/R F/削片/石核/凹石/磨石/叩石/台石/石錐/磨製石斧	
第4節 石製品	256
1 小玉	
2 扇状耳飾	
3 簪	
4 へら状石製品	
第5節 中世	260
1 中世墓	
2 中世遺物	
第Ⅲ章 2区調査成果	263
第1節 検出遺構と出土遺物	263
1 堅穴住居跡	
ST12/ST13/ST14/ST15	
2 溝	
SD1	
3 土坑	
SK72/SK73/SK74/SK75/SK76/SK77	
第2節 包含層出土遺物	281
1 縄文土器	
2 石器	
第Ⅳ章 まとめ	287
第1節 縄文時代後期前半の土器群について	287
1 年代的位置付け	
宿毛式/福田K II式/松ノ木式/なつの木式並行	
2 その他の観察事項	
型式別口徑差/縄文原体型式別点数/赤彩土器	
第2節 松ノ木遺跡の縄文時代石器群について	294
1 各石器について	
2 松ノ木遺跡の石器組成形態	
第3節 弥生時代後期末から古墳時代前期初頭の土器と集落	303
1 弥生時代後期末から古墳時代前期初頭の土器群	
2 弥生時代後期末から古墳時代前期初頭の堅穴住居跡群	
第V章 自然科学分析	309

第1節 赤色顔料付着遺物等の蛍光X線分析について	309
徳島県立博物館学芸員 魚島純一	
第2節 松ノ木遺跡におけるブラント・オパール土器胎土分析	322
ブラント・オパール研究会 藤原宏志	
第3節 松ノ木遺跡出土のサヌカイト製造物および黒曜石製造物の原材料地分析	327
京都大学原子炉実験所 斎科哲男	
第4節 松ノ木遺跡出土の玉類の非破壊分析による蛍光X線および電子スピン共鳴の定性分析結果	346
京都大学原子炉実験所 斎科哲男	
第5節 松ノ木遺跡の自然科学調査	351
バリノ サーヴェイ株式会社	
1 古植生について	
2 土器底部付着物の材質推定	
3 種実遺体同定	
第6節 高知県松ノ木遺跡から出土した炭化材の樹種同定	358
株式会社 山環境研究所	
第7節 松ノ木遺跡の炭化米粒特性と稲作起源	361
佐賀大学 和佐野喜久生・大冢豊揚	
第8節 石器使用痕について	370
株式会社 アルカ 池谷勝典・太田公彦	
第9節 自然科学分析についての補足	377
 おわりに	379
参考文献	380
索引	384
写真図版	
報告書抄録	

挿図目次

第Ⅰ章第1節	
第1図 高知県位置図	1
第2図 本山町位置図	2
第3図 松ノ木遺跡位置図	2
第Ⅰ章第2節	
第4図 四国地帯構造区分	4
第Ⅰ章第3節	
第5図 周辺遺跡地図	8
第Ⅰ章第4節	
第6図 古代駅家関連地図	13
第Ⅱ章第1節	
第7図 松ノ木遺跡周辺図	17
第8図 各年度別調査区配置図	19
第9図 松ノ木遺跡遺構全体配置図	21
第Ⅱ章第2節	
第10図 土器捨て場全体図	28
第11図 土器捨て場遺物出土状況図	29
第12図 土器捨て場土層図	30
第13図 土器捨て場土層柱状図	31
第14図 拡張区層位別出土遺物(1)	34
第15図 拡張区層位別出土遺物(2)	35
第16図 拡張区層位別出土遺物(3)	36
第17図 拡張区層位別出土遺物(4)	37
第18図 拡張区縄文土器接合図	38
第19図 土器捨て場遺物全体ドット図	39
第20図 土器捨て場縄文土器出土状況図	41
第21図 縄文土器接合關係図	42
第22図 土器捨て場型式別出土状況図	43
第23図 土器捨て場全体縄文土器接合ドット図	44
第24図 土器廃棄モデル図	45
第25図 土器廃棄状況図	46
第26図 拡張区土器廃棄状況図	47
第Ⅲ章第1節	
第27図 縄文前期土器(1)	56
第28図 縄文前期土器(2)	57
第29図 縄文前期土器(3)	58
第30図 縄文前期土器(4)	59
第31図 縄文前期土器(5)	60
第32図 縄文中期土器	60
第33図 縄文後期土器深鉢(1)	68
第34図 縄文後期土器深鉢(2)	69
第35図 縄文後期土器深鉢(3)	70
第Ⅲ章第2節	
第36図 縄文後期土器深鉢(4)	71
第37図 縄文後期土器深鉢(5)	84
第38図 縄文後期土器深鉢(6)	85
第39図 縄文後期土器深鉢(7)	86
第40図 縄文後期土器深鉢(8)	87
第41図 縄文後期土器深鉢(9)	88
第42図 縄文後期土器深鉢(10)	89
第43図 縄文後期土器深鉢(11)	90
第44図 縄文後期土器深鉢(12)	91
第45図 縄文後期土器深鉢(13)	92
第46図 縄文後期土器深鉢(14)	93
第47図 縄文後期土器深鉢(15)	94
第48図 縄文後期土器深鉢(16)	95
第49図 縄文後期土器深鉢(17)	96
第50図 縄文後期土器深鉢(18)	97
第51図 縄文後期土器深鉢(19)	98
第52図 縄文後期土器深鉢(20)	99
第53図 縄文後期土器深鉢(21)	100
第54図 縄文後期土器深鉢(22)	101
第55図 縄文後期土器深鉢(23)	102
第56図 縄文後期土器深鉢(24)	103
第57図 縄文後期土器深鉢(25)	104
第58図 縄文後期土器浅鉢(1)	115
第59図 縄文後期土器浅鉢(2)	116
第60図 縄文後期土器浅鉢(3)	117
第61図 縄文後期土器浅鉢(4)	118
第62図 縄文後期土器浅鉢(5)	119
第63図 縄文後期土器浅鉢(6)	120
第64図 縄文後期土器浅鉢(7)	121
第65図 縄文後期土器浅鉢(8)	122
第66図 縄文後期土器浅鉢(9)	123
第67図 縄文後期土器浅鉢(10)	124
第68図 縄文後期土器鉢	125
第69図 縄文後期土器粗製深鉢(1)	131
第70図 縄文後期土器粗製深鉢(2)	132
第71図 縄文後期土器粗製深鉢(3)	133
第72図 縄文後期土器粗製深鉢(4)	134
第73図 縄文後期土器粗製深鉢(5)	135
第74図 縄文後期土器粗製深鉢(6)	136
第75図 縄文後期土器粗製深鉢(7)	137
第76図 縄文後期土器粗製深鉢(8)	138
第77図 縄文後期土器粗製深鉢(9)	139
第78図 縄文後期土器粗製深鉢(10)	140

第79図	縄文後期土器粗製深鉢(11) ······	141
第80図	縄文後期土器粗製深鉢(12) ······	142
第81図	縄文後期土器粗製深鉢(13) ······	143
第82図	縄文後期土器粗製深鉢(14) ·無文浅鉢 (1) ······	144
第83図	縄文後期土器無文浅鉢(2) ······	149
第84図	縄文後期土器無文浅鉢(3) ······	150
第85図	縄文後期土器無文浅鉢(4) ·無文鉢 ······	151
第86図	縄文後期土器双耳壺 ·注口土器 ·壺 · 壺類 ·壺類底部 ······	155
第87図	縄文後期土器深鉢突起 ·筒状突起 ······	156
第88図	縄文後期土器無文深鉢突起 ·無文浅鉢 突起 ·把手 ·壺類突起 ·深鉢底部(1) ·····	157
第89図	縄文後期土器深鉢底部(2) ·浅鉢底部 (1) ······	161
第90図	縄文後期土器浅鉢底部(2) ·鉢底部 ·穿 孔底部 ·多孔底部 ······	162
第91図	補修孔位置集成図 ······	163
第92図	縄文後期土器補修孔 ······	164
第II章第3節		
第93図	拡張区層位別サヌカイト剥片点数 ······	188
第94図	石器器種別出土状況図 ······	189
第95図	拡張区層位別石礫点数 ······	192
第96図	石礫分類別出土状況図 ······	193
第97図	石礫形態模式図 ······	194
第98図	大形石礫参考資料 ······	198
第99図	石器実測図(1)石礫 ······	200
第100図	石器実測図(2)石礫 ······	201
第101図	石器実測図(3)石礫 ······	202
第102図	石器実測図(4)石礫 ······	203
第103図	石器実測図(5)石礫 ······	204
第104図	石器実測図(6)石礫 ······	205
第105図	石器実測図(7)石礫 ······	206
第106図	石器実測図(8)石礫 ······	207
第107図	石器実測図(9)石匙 ·扶入石器 ······	218
第108図	石匙参考資料 ······	219
第109図	扶入石器 ·削器参考資料 ······	221
第110図	石器実測図(10)石錐 ······	223
第111図	石器実測図(11)削器 ······	225
第112図	石器実測図(12)削器 ······	226
第113図	石器実測図(13)楔形石器 ······	229
第114図	石器実測図(14)楔形石器 ······	230
第115図	楔形石器参考資料(1) ······	231
第116図	楔形石器参考資料(2) ······	232
第117図	石器実測図(15)R F ·削片 ······	233
第118図	石器実測図(16)剥片 ······	235
第119図	石器実測図(17)剥片 ·石核 ······	236
第120図	石器実測図(18)凹石 ·磨石 ·叩石 ······	238
第121図	石器実測図(19)叩石 ·台石 ······	239
第122図	石錐分類別出土状況図 ······	241
第123図	石錐長幅比 ·重量分布図 ······	243
第124図	南四国石錐長幅比 ·重量分布図 ······	244
第125図	石器実測図(20)石錐 ······	246
第126図	石器実測図(21)石錐 ······	247
第127図	石器実測図(22)石錐 ······	248
第128図	石器実測図(23)石錐 ······	249
第129図	石器実測図(24)石錐 ·磨製石斧 ······	250
第II章第4節		
第130図	石製品実測図 ······	258
第131図	玦状耳飾参考資料 ······	258
第II章第5節		
第132図	中世墓遺構図 ······	260
第133図	中世遺物実測図 ······	261
第III章第1節		
第134図	2区遺構配置図 ······	264
第135図	ST12遺構図 ·遺物実測図(1) ······	265
第136図	ST12遺物実測図(2) ······	266
第137図	ST13遺構図(1) ·遺物実測図(1) ······	268
第138図	ST13遺構図(2) ·遺物実測図(2) ······	269
第139図	ST14遺構図(1) ······	271
第140図	ST14遺構図(2) ·遺物実測図(1) ······	272
第141図	ST14遺物実測図(2) ······	273
第142図	ST14遺物実測図(3) ······	274
第143図	ST15遺構図 ·遺物実測図 ······	275
第144図	SD1遺構図 ······	277
第145図	SD1遺物実測図 ······	278
第146図	土坑遺構図 ······	279
第147図	土坑遺物実測図 ······	280
第III章第2節		
第148図	2区出土縄文時代遺物実測図 ······	281
第IV章第1節		
第149図	縄文後期型式別集成図(1) ······	288
第150図	縄文後期型式別集成図(2) ······	289
第IV章第2節		
第151図	南四国石材別遺跡分布図 ······	300
第152図	拡張区層位別炭化穀実点数 ······	301
第IV章第3節		
第153図	弥生 ·古墳時代土器縦年(1) ······	304
第154図	弥生 ·古墳時代土器縦年(2) ······	305
第155図	弥生 ·古墳時代遺構変遷図 ······	308
第V章第1節		

第1図	赤色顔料分析(1)	311
第2図	赤色顔料分析(2)	312
第3図	赤色顔料分析(3)	313
第4図	赤色顔料分析(4)	314
第5図	赤色顔料分析(5)	315
第6図	赤色顔料分析(6)	316
第7図	赤色顔料分析(7)	317
第8図	赤色顔料分析(8)	318
第9図	赤色顔料分析(9)	319
第V章第3節		
第1図	黒曜石原産地	329
第2図	サヌカイト及びサヌカイト様岩石の原産地	336
第V章第4節		
第1図	松ノ木遺跡出土小玉No577(60798)の螢光X線スペクトル	348
第2図	松ノ木遺跡出土石製簪? No581(60799)の螢光X線スペクトル	348
第3図	松ノ木遺跡出土玦状耳飾No579(60800)の螢光X線スペクトル	348
第4図 松ノ木遺跡出土玦状耳飾No578(60801)の 螢光X線スペクトル		
..... 349		
第5図	松ノ木遺跡出土小玉(60802)、石製簪? (60799)のESR信号	350
第V章第5節		
第1図	土器底部付着白色物質のX線回折チャートと検出鉱物	353
第V章第7節		
第1図	松ノ木遺跡の位置とその周辺地形図	361
第2図	比較基準遺跡の炭化米粒長・幅平均値の分布	363
第3図	松ノ木遺跡の粒長頻度分布図	365
第4図	北部九州及び韓国の比較遺跡の炭化米粒長・幅平均値の分布図	367
第5図	松ノ木遺跡及び比較遺跡の炭化米粒長・幅平均値の分布図	368
第V章第8節		
第1図	資料実測図	373

表目次

第Ⅰ章第3節	
表1 周辺遺跡一覧	9
第Ⅰ章第5節	
表2 松ノ木遺跡年次別調査内容	18
第Ⅱ章第1節	
表3 拡張区層位別出土遺物一覧表	32, 33
第Ⅱ章第2節	
表4 前期・中期縄文土器観察表	61~64
表5 後期縄文土器観察表	165~187
第Ⅱ章第3節	
表6 サヌカイト拡張区層位別重量	190
表7 石器観察表	208~216
表8 南四国石匙一覧表	220
表9 南四国石錐一覧表	224
表10 南四国楔形石器一覧表	228
表11 南四国石錐分類別一覧表	244
表12 石器観察表	251~255
第Ⅱ章第4節	
表13 石製品観察表	259
第Ⅱ章第5節	
表14 1区中世遺物観察表	261
第Ⅲ章第1節	
表15 2区出土土器観察表	283, 284
表16 2区出土石器・鉄器観察表	285, 286
第Ⅲ章第2節	
表17 2区出土縄文土器観察表	286
第Ⅳ章第1節	
表18 縄文土器型式別一覧表	292
表19 赤彩土器型式別一覧表	293
第Ⅳ章第2節	
表20 松ノ木遺跡と中・四国の石器組成	295
表21 南四国石錐一覧表	296
表22 南四国石斧一覧表	299
表23 南四国遺跡石材による類型	301
第Ⅳ章第3節	
表24 弥生・古墳時代住居変遷表	307
第Ⅴ章第2節	
表1 プラント・オパール胎土分析結果	325
第Ⅴ章第3節	
表1-1 各黒耀石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値(1)	330
表1-2 各黒耀石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値(2)	331
表1-3 各黒耀石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値(3)	332
表1-4 各黒耀石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値(4)	333
表1-5 各黒耀石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値(5)	334
表2-1 各サヌカイトの原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値(1)	
表2-2 各サヌカイトの原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値(2)	338
表2-3 原産地不明の組成の似た遺物で作られた遺物群の元素比の平均値と標準偏差値	339
表3-1 松ノ木遺跡出土黒耀石製造物の元素比分析結果	340
表3-2 松ノ木遺跡出土サヌカイト製造物の元素比分析結果	341
表4-1 松ノ木遺跡調査区1出土の縄文時代後期前葉のサヌカイト製造物の原材料产地推定結果(1)	342
表4-2 松ノ木遺跡調査区1出土の縄文時代後期前葉のサヌカイト製造物の原材料产地推定結果(2)	343
第Ⅴ章第4節	
表1-1 松ノ木遺跡出土玉類の分析結果(1)	347
表1-2 松ノ木遺跡出土玉類の分析結果(2)	347
表1-3 松ノ木遺跡出土玉類の分析結果(3)	347
表1-4 松ノ木遺跡出土玉類の分析結果(4)	347
第Ⅴ章第5節	
表1 分析試料	352
表2 植物珪藻体分析結果	352
表3 松ノ木遺跡の種実遺体同定結果	356
第Ⅴ章第6節	
表1 松ノ木遺跡から出土した炭化材の樹種同定結果	358
第Ⅴ章第7節	
表1 松ノ木式及び比較遺跡の炭化米粒特性の平	

均値及び標準偏差	364
表2 松ノ木式及び比較遺跡の炭化米粒厚の頻度分布・平均値・標準偏差	364
表3 松ノ木式及び比較遺跡の炭化米粒長/幅比の頻度分布・平均値・標準偏差	364
表4 松ノ木式及び比較遺跡の炭化米粒の粒型分 布表	366
第V章第9節	
表25 土器胎土プラント・オパール試料一覧表	
	377

グラフ目次

第II章第1節

グラフ1 土器捨て場レベル別遺物出土量	40
グラフ2 土器捨て場レベル別型式出土量	43
第II章第3節	
グラフ3 石器器種別点数	188
グラフ4 サヌカイト製石器器種別重量	191
グラフ5 拡張区層位別サヌカイト出土重量	191
グラフ6 拡張区石錐層位・分類別点数	194
グラフ7 石錐基部形態・分類別点数	195
グラフ8 石錐石質・分類別点数	195

グラフ9 石錐重量・分類別点数	195
グラフ10 石錐破損形態・分類別点数	196
グラフ11 石錐各遺跡破損比較	199
グラフ12 南四国石匙石質・分類別点数	217
グラフ13 石鍶分類別点数	242
グラフ14 石鍶重量別点数	242
第IV章第1節	
グラフ15 型式・器種別口径分布	292
第IV章第2節	
グラフ16 石器器種別構成比率	294

第Ⅰ章 遺跡の概要と調査経緯

第1節 調査成果の概説

1 遺跡の内容

遺跡の立地

松ノ木遺跡は四国の中間部に位置している。吉野川の上流域にあたり松ノ木遺跡の所在する本山町、隣の土佐町を含め山間部では珍しく、盆地状に吉野川沿いに平野部が開けている。標高は250m程度である。

高知県長岡郡本山町寺家の現水田地帯に遺跡は約1万m²の広がりを持ち、当該地域では最大規模の遺跡である。

調査主体

松ノ木遺跡は平成2年に発見されて以来、今回の調査で5次調査となる。発見時の緊急調査以外は全て、本山町教育委員会が主体となり、学術調査を実施してきた。今回の調査も同様である。

本調査の概略

今回の調査では縄文時代後期前半の「土



第1図 高知県位置図

器捨て場」出土土器は縄文時代後期前半を主体とし、若干縄文時代前期の土器が混じる。縄文時代後期に含まれる土器群は大きく分けて、本遺跡を標式とする松ノ木式が最も多く、次いで高知県西部の宿毛塚を標式とする宿毛式が多い。縄文時代前期に含まれるものは瀬戸内地方の型式に含まれる磯ノ森式、彦崎Z I、II式等がまとまって出土している。

それ以外に弥生時代後期後半から古墳時代初頭の住居跡、土坑等が検出されている。

また今回の調査で初めて、中世の土坑墓と考えられるものを1基検出した。15世紀前半と考えられる青磁、備前、鍋等が出土している。

2 本報告の構成

本報告書は「土器捨て場」出土遺物を中心として、その縄文土器、石器を報告している。

松ノ木遺跡の考古学的環境 「第Ⅰ章 遺跡の概要と調査経緯」(p1~26)

遺跡の内容を把握するために地理的環境、歴史的環境を取り上げ、松ノ木遺跡を取り巻く、考古学的環境を取り上げた。また「第3節周辺の遺跡」では松ノ木遺跡の所在する地方は嶺北と呼ばれ、高知県中央山間部として、考古学的に各町を超えて、ひとまとめりの考古学的環境にあるものと考えられ、

今までの考古学的調査成果を概観した。

縄文時代後期前半の土器群「第Ⅱ章 1区調査成果」(p65 ~187)

縄文時代の「土器捨て場」についての遺物出土状況、出土遺物を取り上げている。本報告書の中心をなすものである。「土器捨て場」は自然の落ち込みを利用した廃棄帯である。

遺物は大きく分けて、「縄文土器」、「石器」に分かれており、更に「縄文土器」は前期、中期、後期に分かれる。特に注目されるのは縄文時代後期前半の土器群である松ノ木式、及び宿毛式である。松ノ木遺跡の土器群で最も重要な位置を占めている。

遺物等の説明については、個別には余り触れておらず、分類、南四国でのあり方を中心に取り上げ、考察的な内容は本文中に取り込んでいる。遺物の個別の内容については観察表を参照していただきたい。

中世墓「第Ⅱ章 中世」(p260、261)

15世紀の石組みの墓を1基検出している。青磁、備前、鍋等が出土している。

弥生時代後期後半から古墳時代初頭「第Ⅲ章 2区調査成果」(p263 ~286)

松ノ木遺跡では縄文時代以外に注目されるものとして、弥生時代後期から古墳時代初頭の住居跡群



第2図 本山町位置図



第3図 松ノ木遺跡位置図 (1万5千分の1)

が今回の調査を含め14軒検出されている。今回の調査では該期の4軒の住居跡、溝、土坑等を報告している。

S T 14では徳島県東部の土器の搬入が認められ、また庄内式、布留式に相当するものが認められている。

縄文土器、石器についての考察「第Ⅳ章 まとめ」(p287~302)

縄文土器については型式学的な考察を若干取り上げている。宿毛式、福田K II式、松ノ木式、なつめの木式等の後期土器について簡単に編年的な位置付けについて触れた。前期の土器群も纏まって出土しており、それについては本文中で取り上げている。

石器については後期前半の石礫等が多量に出土しており、西日本でも有数と考えられる。南四国での松ノ木遺跡の位置付けを行うと共に、若干石器から見た生業について触れた。

自然科学分析について「第V章 自然科学分析」(p309~378)

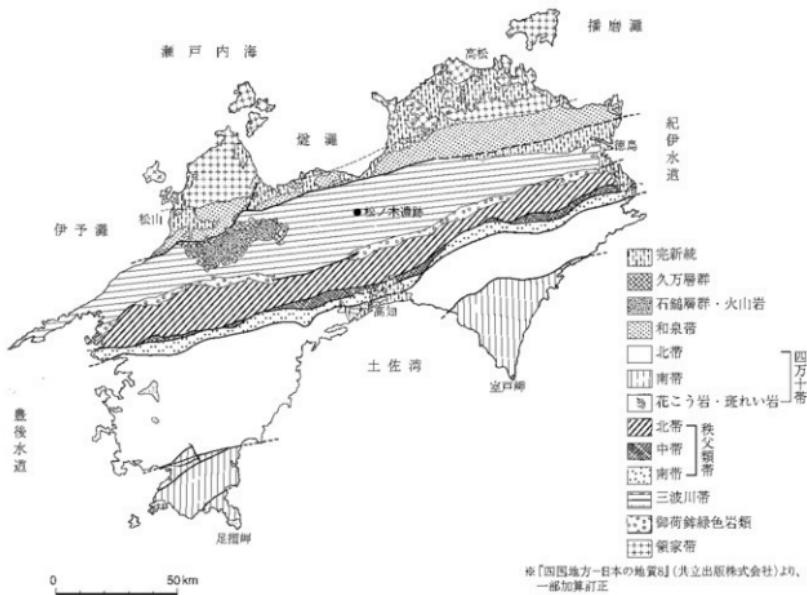
赤色顔料、炭化種子、土器胎土中プランクト・オパール、サヌカイト同定、石器使用痕の縄文時代の遺物についての分析を依頼した。縄文時代後期前半の土器の赤色顔料はベンガラ、土器胎土中からはシコクビエ、サヌカイト同定は香川県金山産の分析結果を得ている。また、古墳時代前期初頭の住居跡炉跡内より出土した炭化米の分析を依頼している。

第2節 地理的環境

松ノ木遺跡の所在する高知県長岡郡本山村は四国のほぼ中心部に位置する。本山村の町勢は面積134.36km²、人口約4,800人で高知県内53市町村の中で面積・人口共に中位に位置している。本山村は中心の平野部で標高250m前後を測り、高知平野部とは比高差240m程もあり、年平均気温も高知平野部とは3度も違った山間部の町であることを顯している。冬期になると高知平野から根曳峠^{ねびきとうげ}を越えると南国高知とは思えない雪に見舞われることもしばしばである。本山村の地勢は、南北約18km、東西約8kmで土地の大部分は急峻な山林である。

町の後背は白髪山県立自然公園となり、山肌には杉、檜の植林が行われ、花粉が飛び交う季節には町全体を黄色い煙のように花粉が辺りを覆うこともしばしばである。町の中央を四国三郎吉野川が流れ、吉野川沿いに町は細長く発達している。石鎚山から剣山に連なる険しい四国山脈が北方に控え、愛媛県と国境をなしている。本山村の西側部を流れる吉野川の支流汗見川伝いに県道264号線が標高1400m余りの四国山地を貫き、猿田峠の白髪トンネルを抜けると愛媛県伊予三島市に至り瀬戸内海へと通じる。その直線距離は高知平野部へと同様に25kmであり、本山村は丁度四国の腰にあたる。

吉野川の源は四国山地石鎚山の近くの瓶ヶ森（標高1896m）に発する。吉野川は四国山地の北、南嶺から中小河川を集め、徳島県池田町まで大歩危・小歩危の峡谷が続くことになる。険しい山地を縫つ



第4図 四国地帯構造区分

てきた吉野川は池田町を抜けると急に表情を変え、広々とした河原が両岸に広がり、肥沃な平野部をゆったりと徳島市街地の河口まで流れ下っていく。吉野川は150km余りの道のりを絶え間なく表情を変え、紀伊水道に注ぐ。

吉野川は本山町の西隣土佐町の早明浦ダムで暴れ川は堰止められるものの、この周辺で吉野川本流に土佐町田井から地蔵寺川、本山町寺家で汗見川が合流し、扇状地を形成している。吉野川上流域ではこの周辺が最も平野部が開けた地形である。四国山地の中にあって、ぽっかりと口を開けたように平野部を作り出し、まさに四国の臍といえる。松ノ木遺跡は吉野川本流と汗見川の合流地点に展開する遺跡である。松ノ木遺跡の現況は水田であり、吉野川の低位段丘に相当する。周辺は寺家と呼ばれ、後背の山に向かってなだらかに傾斜を見せており、県道262号線磯谷本山線より北側に現在の集落が展開している。

吉野川水系は中央構造線沿いに発達した河川で、中央構造線の北側を和泉帯、南側を三波川帯、更に南側を秩父累帯の地帯構造に区分される。和泉帯は近畿の和泉山脈から松山市長浜町青鳥まで続く、東西約300km、南北約14kmの帯状の地帯である。和泉帯の主な岩相は砂岩・砂質泥岩・泥岩からなる。三波川帯は九州佐賀・長崎半島から関東山地まで約800km、四国内での幅約30kmの地帯である。岩相は結晶片岩類からなる。秩父累帯は徳島県小松島から愛媛県西宇和郡明浜町の約220km、幅9~24kmの累帯で南側を四万十帯と境を接し、仏像構造線をなしている。秩父累帯は北・中・南帯に分けられ、更にその中で細区分が行われている。本山町周辺での北帯の岩相は碎屑岩類を主として、チャート・塩基性溶岩が僅かに入る。他に秩父帯と三波川帯に挟まれて本山町の南側には御荷鉢緑色岩類が展開している。御荷鉢緑色岩類はチャート・塩基性溶岩・凝灰岩・玄武岩質枕状溶岩・斑れい岩・輝緑岩・超塩基性岩からなっている。

松ノ木遺跡に関わる岩相は三波川帯の結晶片岩類と御荷鉢緑色岩類である。三波川帯の結晶片岩類は泥質片岩・珪質片岩・塩基性片岩で、その他に変斑れい岩、蛇紋岩、石英片岩が認められている。吉野川で転石として採集できるものは緑色片岩、泥質片岩、石英片岩類の石材である。チャート等の剥片石器に利用できる石材は殆ど採集不可能である。

第3節 周辺の遺跡

1 嶺北地方の考古学的調査

松ノ木遺跡の所在する本山村は、近隣の5ヶ町村と共に嶺北地方と呼ばれ、吉野川流域に沿って集落が点在している。この地域は山間部ということもあり、農業、林業の生業を主としており、高知平野部のように余り開発の手が入らず、従って考古学調査も少ない地域であった。しかしながら、文化10年(1813)に編纂された『南路志』にも土佐町森字土居の琴平神社所蔵の銅鐘が掲載されるなど、青銅器文化を知る上で重要な地域であり、考古学的にも注目されてきた。

嶺北地方では昭和20年代になって、田井村(現土佐町田井)の上野下うわだ(現田井字池の東)で縄文土器、弥生土器等が発掘調査されたのが初めてと考えられる。土佐町の公報新聞に当時の田井中学校校長の高石文一(昭和24~27年任)により、「嶺北文化史」として13回の連載中に触れられている。

この記事の中で、嶺北では縄文時代遺物が出土したのはこれが初めてのことと土器以外に石斧、石匙、石鎌を採集したこととなっている。この記事はおそらく昭和25年(1950)8月に岡本健児等により発掘調査された玉屋敷遺跡のことと考えられ、岡本は「高知県田井村の縄文式遺跡と遺物」の短文を昭和25年9月20日付けの『貝塚』に寄稿している。「嶺北文化史」によると森川沿い(地蔵寺川)の田井中学校(昭和25年9月校舎建築)の工事中に縄文・弥生時代の遺物が出土したとのことであり、宿毛貝塚の調査を行ったことのある岡本等が数日間の調査を行ったものと考えられる。発掘調査では殆ど遺物は出土しなかったらしく、その後の『土佐町資料』(1981)、『土佐町史』(1984)に公表された遺物も高石が採集していたものが使われたものと考えられる。宿毛貝塚の発掘調査は昭和24年に行われ、高知県の縄文時代研究の礎となったものの、当時、高知県下において縄文時代研究は他に見るべきものは少なく、玉屋敷遺跡の研究は宿毛貝塚と比較研究する程度に留まっていた。岡本は玉屋敷遺跡出土縄文土器を玉屋敷式と型式設定を行い縄文時代中期に編年し、瀬戸内の船元I式並行と位置付けを行っている。但し、昭和43年発行の『高知県史考古編』では前期末に修正されている。石鎌は16点及び横型石匙1点が出土している。石質については不明で、「嶺北文化史」では「盤石」となっているところからチャートの可能性も考えられるが、松ノ木遺跡では圧倒的にサヌカイト製で占められていることからサヌカイトの可能性も捨て難い。また縄文土器については磨消縄文土器も含まれているようで後期前半宿毛式に相当するものが1点出土していたようである。玉屋敷遺跡の遺物については現在不明であり、詳細は確認できなかった。

「嶺北文化史」の中で嶺北地方で考古遺物が出土した遺跡名が幾つか知られている。田井村大字田井、森村北泉(静岡遺跡)、本山村天神前から弥生土器が出土したとのことである。しかしながら嶺北地方の考古学的調査は昭和50年代まで待たなければならない。昭和50年代になって、本山村では町史編纂事業の一環として、長徳寺跡の発掘調査が高知女子大教授岡本健児、高知追手前高校前田和男等によって行われている。余談になるが、この調査に後の松ノ木遺跡第一発見者となる竹田瑞男が参加している。

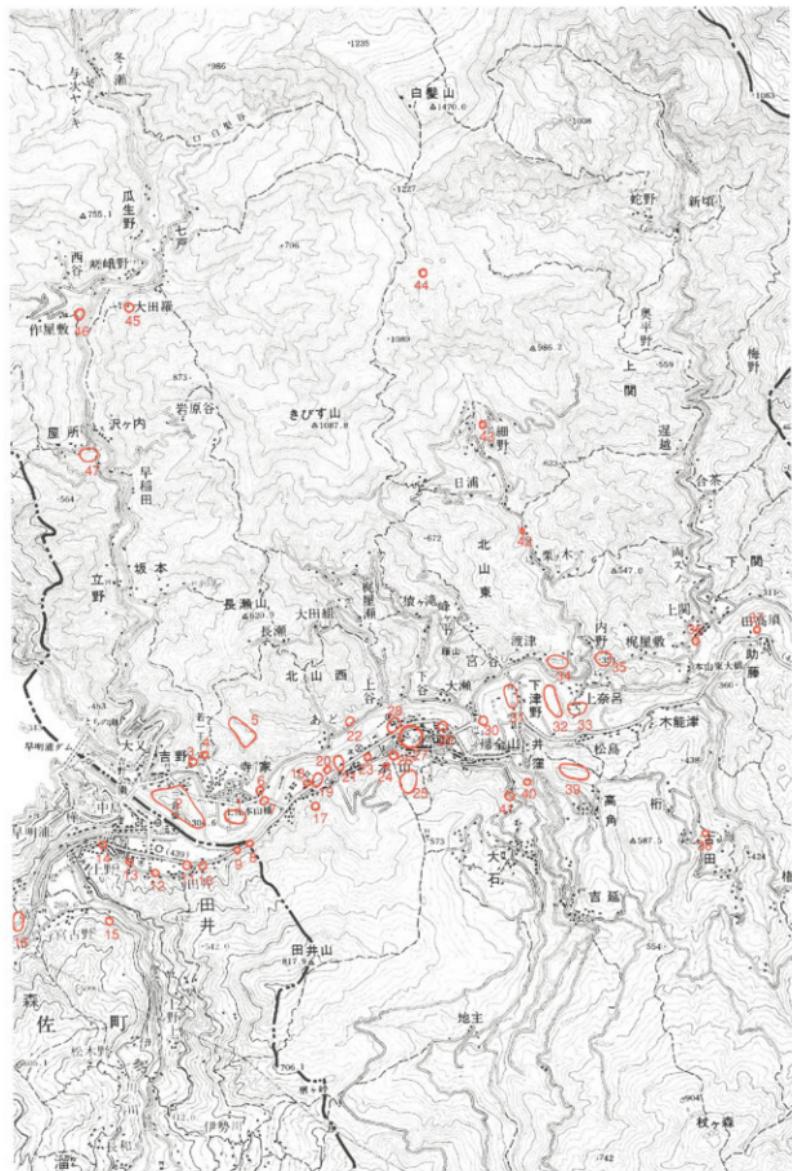
長徳寺跡の調査は昭和51年1次調査、昭和52年2次調査が実施され、短期間ではあるものの、縄文時代早期の無文土器・大形梢円押型文土器、小型石錐等が出土している。また弥生時代後期中葉、終末の土器、古代から中世の遺物、多宝塔基礎石根石群と考えられるものも出土している。長徳寺跡は在

地豪族により久安5年(1149)に創建され、本山町寺家を中心とした吾橋荘の中核的な存在であり、後には戦国式将本山氏の支配下に組み込まれていくことになる。中世嶺北地方沿革の地であり、町史編纂に際し郷土史の解明の為に発掘調査が行われたものと考えられる。『長徳寺跡発掘調査報告書』の報文には長徳寺跡以外にもそれまで採集されていた嶺北高校遺跡(永田遺跡)、特に中でも岡本による「嶺北地方発見の銅矛」が所収されていることである。土佐町駒野山ノ神神社の銅矛3本が新たに紹介され、本山町北山瀬ノ上出土1本、土佐町柚木妙見社1本の計5本が嶺北地方の銅矛として取り上げられている。詳しい内容は報告書に譲るとして、四国の脇にあたる嶺北地方のこの一帯が弥生時代の瀬戸内、高知平野部との中継地点として重要な地域であることが判明し始めたことである。

『長徳寺跡発掘調査報告書』が昭和52年(1977)、『本山町史 上巻』が昭和54年、また昭和56年に『土佐町資料』も相次いで発行され、これにより嶺北地方の考古学的研究の今までの集成が調うことになる。その後、昭和56年1月に本山町本山の吉野川右岸段丘で弥生時代後期後半の遺跡が発見される。地名から銀杏ノ木遺跡と命名され、周辺の宅地化に伴い岡本を担当とし、本山町教育委員会が発掘調査を実施している。調査対象面積は400m²で、小規模な竪穴跡を1基検出している。調査者は形態的に見て工房跡ではないかとの所見を述べている。出土土器はヒビノキII式と呼ばれる弥生時代後期後半に属する土器群で、このヒビノキ式は高知県香美郡土佐山田町百石町ヒビノキ遺跡を標準とするもので、銀杏ノ木遺跡発掘前の昭和52年には『ひびのき遺跡』として報告書が刊行されており、高知平野部の弥生時代後期の叩き技法を有する土器群を編年指標としたものであった。岡本は銀杏ノ木遺跡出土上の弥生時代後期後半の土器群をヒビノキII式に対比して、嶺北地方の土器型式に設定し、銀杏ノ木式の型式名を付与する。しかし、現在の状況は嶺北地方と高知平野部の弥生時代後期の土器群について、際立った相違点は認め難く、高知平野部と同様にヒビノキ式の型式名を使用しているのが実情である。

昭和63年、平成元年に高知県教育委員会により香美郡・長岡郡、平成2・3年に土佐郡・吾川郡の遺跡分布調査が実施され、嶺北地方では約130ヶ所の遺跡が遺跡台帳に搭載されることになる。時代別に見ると縄文11、弥生・古墳16、古代3、中世76、近世23ヶ所となっている。大部分が中近世に含まれるものであり、縄文時代から古墳時代にかけての遺跡は30ヶ所もなく極めて少ない状況を示している。大部分は土佐町田井から本山町本山にかけての吉野川沿いに集中している。これらの遺跡はかつて知られていたものが大部分であり、新たな発見遺跡は少なかったようである。

平成2年、『高知県遺跡地図－香美・長岡ブロック－』が発行される直前になって、新たな遺跡－松ノ木遺跡が発見されることになる。先の長徳寺跡の発掘調査に参加したことのある竹田瑞男氏宅に庭土として運び込まれた土の中に土器の混入していたことが発見の端緒となる。竹田は本山町教育委員会に連絡を取り、更に本山町教育委員会は高知県教育委員会に連絡を取る。県教育委員会文化振興課埋蔵文化財班の担当数名が寺家の現場に赴き、農道拡幅工事中で部分的に残っていた60m²の緊急調査を行うことになる。調査は平成2年3月29日から4月14日まで行っている。担当調査員は県埋蔵文化財班の出原恵三、発見者である竹田瑞男、本山町公民館の松葉孝志等が参加し、熱気のある調査となつた。寺家の汗見川と吉野川本流が合流する地点で、遺跡は汗見川に面した低位段丘上に立地していた。調査面積は狭いものの、溝状の自然の落ち込みから多量の縄文土器が出土した。量的には県下最大のものであり、西日本でも有数の量となつた。宿毛貝塚をはじめ片船遺跡、三里遺跡等の県下の純



第5図 周辺遺跡地図 (S=1/5万)

文時代を代表する遺跡は県西部に偏り、中央部では皆無に等しかった。そのような状況下で圧倒的なその遺物量に松ノ木遺跡の名前が知れ渡ることになった。考古学史に残るような遺跡に現場は沸き立ち調査は進められた。かつて嶺北地方の考古学調査ではなかったことである。

また遺物量の多さだけではなく、かつて知られていないかった土器群であることで松ノ木遺跡は研究者の注目的となった。西日本の縄文研究は関東に比べその遺跡、遺物量の少ないとからも停滞気味であった。僅かばかりの研究論文が数人の研究者により発表されているにはいたものの、新たな展開を迎えるものではなかった。しかしながら、松ノ木遺跡の縄文時代後期の土器群を目の前にして、西日本の縄文研究は俄に活況を呈し始める。松ノ木遺跡は平成2年の調査を契機として、平成7年までに5度の学術調査が継続されることになる。かつて西日本縄文研究の中で高知県がリードする立場ではなく、後塵を拝してきた。平成になり、西日本の縄文研究は活況を呈し始めるが、松ノ木遺跡はその中枢的な立場となる。

辛口に言えば、行政的に建て前だけの埋蔵文化財保護、埋蔵文化財厄介者・お荷物的な取り扱いからは、松ノ木遺跡はおそらく日の目を見なかった遺跡である。行政という名の免罪符を盾に盜掘・排除される遺跡達の中にあって、行政・住民・研究者の取り組みにより活かすことのできた遺跡である。

高知県における埋蔵文化財行政は、平成3年の(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターの設立、県下の遺跡分布の実施と共に、市町村の調査件数も飛躍的に増大していく。嶺北地方では先の松ノ木遺跡を端緒として、本山町堀ノ尻遺跡、永田遺跡、銀杏ノ木遺跡、土居屋敷跡遺跡、土佐町八反坪遺跡、田畠遺跡、宮古野遺跡が発掘調査されることになり、新たな知見を付け加えつつある。

2 嶺北地方の遺跡内容

旧石器時代

嶺北地方では現在のところ旧石器時代の遺物は見つかっていない。吉野川中・下流域での徳島県で椎ヶ丸、洞草、日吉谷、上喜来遺跡等が流域沿いに旧石器時代の遺跡群を形成しているものの、徳島県池田町を境として、吉野川上流域では一遺跡も発見されていない。高知平野部についても最近まで

表1 周辺遺跡一覧表

遺跡番号	遺跡名	時代	
1	松ノ木遺跡	縄文～古墳・中世	
2	小倉山城跡	中世	
3	長徳寺跡	縄文・中世	
4	寺家古墓	平安・中世	
5	鳥石城跡	中世	
6	寺家遺跡	中世	
7	東久保遺跡	弥生	
8	鳥井遺跡	縄文	
9	大畠遺跡(同遺跡)	弥生	
10	鶴ノ口遺跡	縄文・弥生	
11	八反坪遺跡	縄文	
12	下田遺跡	弥生	
13	田井古屋遺跡	弥生	
14	玉屋敷遺跡	縄文	
15	美佐遺跡	弥生	
16	野瀬遺跡	縄文	
17	伝八木伊良墓	中世	
18	銀杏ノ木遺跡	弥生・中世	
19	東畠遺跡	弥生・中世	
20	新堂遺跡	弥生・中世	
21	天神前遺跡	弥生	
22	北山廬ノ下遺跡	中古偏後出土	
23	芝原散逸跡	弥生・古墳	
24	山内南削字一照郡島	近世	
25	本山城跡	中世	
26	上の坊遺跡	近世	
27	木山十居堀戸跡	縄文～古墳・中近世	
28	横木高校遺跡(永田遺跡)	弥生・中世	
29	福ノ尻遺跡	弥生・中世	
30	越金山(野山廬山母堂秋田夫人墓)	近世	
31	下津野城跡	中世	
32	下津野遺跡	縄文・弥生・中世	
33	上奈跡遺跡	縄文・中世	
34	渡瀬遺跡	中世	
35	駒馬城跡	中世	
37	上間遺跡	中世・近世	
38	古田城跡	中世	
42	木山一揆第1千人塚	近世	
43	木山一揆第2千人塚	近世	
44	萬石左馬之助通吉之助墓	近世	
45	七戸跡塚	近世	
46	瓜生野城跡	中世	
47	矢所城跡	中世	

旧石器時代は僅か高知市介良の高間原古墳群の石室から偶然、チャート製の細石刃核1点が昭和40年に見つかっていただけで、旧石器時代空白地帯の様相を呈していた。しかし、平成8年に高知自動車道路建設に伴い、高間原古墳群より北方3kmの高知平野部の北麓谷部より多量のチャート製細石刃核・ナイフ形石器が出土した。奥谷南遺跡は旧石器時代空白地帯の汚名を返上した遺跡である。縄文時代早期・後期にはサヌカイトが松ノ木遺跡、奥谷南遺跡、及び土佐山田町の飼古屋岩陰遺跡にもたらされていることから、旧石器時代以降はサヌカイト搬入経路は確実に確立していたものと考えられる。吉野川水系に産する結晶片岩類・御荷鉢綠色岩類が奥谷南遺跡、高知市福井遺跡(块状耳飾、石包丁)に搬入されており、嶺北地方と高知平野部と直接繋がりがあったものと考えられる。その経路が旧石器時代まで遡るかどうかは今のところ確認は掴めていない。しかしながら、今後も高知平野部では奥谷南遺跡を中心として、次々と旧石器時代遺跡が見つかることが予想されることから、吉野川沿いに段丘が発達し、中小河川も多い嶺北地方でも、旧石器時代の遺跡が発見されることは充分考えられる。

縄文時代

縄文時代の遺跡は嶺北地方では約15ヶ所に満たない。その中で突出した遺跡はやはり松ノ木遺跡である。松ノ木遺跡では早期から晩期までの遺物が出土しており、嶺北地方の縄文時代全般を通じての研究は、松ノ木遺跡が全てであると言っても過言ではない。

松ノ木遺跡以外では早期の長徳寺跡、前期・後期の玉屋敷遺跡、平成8年に土佐町田井で松ノ木式が出土した宮古野遺跡、晩期の八反坪遺跡が主だった遺跡である。それ以外の遺跡については詳細は不明である。草創期に属する遺跡は未発見である。高知平野部でも奥谷南遺跡が唯一である。早期に含まれるのは、松ノ木遺跡(『松ノ木遺跡Ⅲ』1993)から無文土器及び小瀧石錐6点、チャート製スクレイバーが出土している。長徳寺跡からは大形楕円押型文土器、無文土器、小型石錐2点が出土している。銀杏ノ木遺跡からはチャート製のトロトロ石器が1点出土しており、注目される。早期に含まれるものは少なく、また特に嶺北地方特有なものは認められていない。土佐山田町飼古屋岩陰遺跡から多量のサヌカイト・チャート製石錐が出土しており、また高知県西部の四万十川水系でも同様に石錐を多量に伴う早期の遺跡が知られているものの、嶺北地方では今のところそうした遺跡は未発見である。

前期・中期については松ノ木遺跡(『松ノ木遺跡Ⅰ』1992、『松ノ木遺跡Ⅲ』1993)から纏まって出土しており、型式名としては瀬戸内地方の羽島下層式から彦崎ⅡⅠ、Ⅱ式、磯ノ森式、大歳山式、田井式、中期では船元Ⅰ式、里木Ⅱ、Ⅲ式が認められている。前期から中期後半にかけては瀬戸内の様相が強い。

後期初頭になっても、やはり瀬戸内的な様相は継続するものの、中津式では捉えられないものも出現するようである。後期前半になると宿毛式が主体となり、若干ではあるが福田KⅡ式が認められている。宿毛式期の堅穴住居跡1棟を検出しており、県下では縄文時代の住居跡は極めて珍しい。宿毛式の後は、四国西部の影響を受けながら、松ノ木式の成立となる。松ノ木式についての詳しい内容は、別章で取り上げたい。前半から中葉にかけては松ノ木遺跡でも出土量は減る傾向にある。

晩期については土佐町田井の八反坪遺跡(『土佐町資料』1981、『土佐町史』1984)から前半の瀬戸内の黒土BⅠ式に対比されるものが、また後半では刻目突帯文土器が松ノ木遺跡(『松ノ木遺跡Ⅲ』1993・『永田遺跡』1995)から出土している。昭和28年に八反坪遺跡は確認されて以来、平成5・7年に開発前に試掘調査が実施されただけで、その際も遺構・遺物は検出されておらず、詳細は不明のままである。

弥生・古墳時代

弥生・古墳時代の遺跡数は約20ヶ所程度である。土佐町の地蔵寺川流域の田井から本山町本山の吉野川流域に遺跡が連なる。時期的には弥生時代後期後半から古墳時代初頭に含まれるもののが大部分である。下流域から遺跡名を列挙すれば、本山町堀ノ尻、永田（嶺北高校校庭）、天神前、銀杏ノ木、松ノ木遺跡、土佐町玉屋敷、田畠遺跡等の集落遺跡を上げることができる。住居跡は永田、松ノ木、田畠、銀杏ノ木遺跡から検出されており、松ノ木遺跡では今回の5次調査を含め、14棟が検出されており、永田遺跡では2棟、田畠遺跡2棟、銀杏ノ木遺跡2棟の合計20棟が調査されている。また吉備、徳島からの搬入土器も見られるようになる。

他の時期については造構・遺物も少なく、松ノ木遺跡（『松ノ木遺跡Ⅳ』1996）で前期中葉の土器が数点認められ、その中で有輪羽状文の壺は高松平野からの搬入品と考えられている。中期末のものとしては永田遺跡の土坑墓、松ノ木遺跡の溝等を上げることができる。嶺北地方の集落跡は弥生時代後期後半から古墳時代初頭の時期に集中する特徴があり、高知平野部と呼応するかのように嶺北地方でもこの時期に遺跡数が飛躍的に増大する。

集落跡以外に嶺北地方の弥生時代を特徴づけるものに青銅器がある。銅鐸1個、銅矛5本が知られている。銅鐸は土佐町土居の琴平神社所蔵の1個は突線鉢2式鐸の近畿式鐸、土佐町駒野山ノ神神社の銅矛3本は中広形銅矛Ⅱ式、本山町北山瀬ノ上出土1本も中広形銅矛Ⅱ式、土佐町袖ノ木妙見社1本は広形銅矛Ⅱ式にそれぞれ分類される。高知県下では銅鐸は10個発見されており、内8個が突線鉢式鐸に含まれるものである。①袈裟擗文で鉢に双頭渦巻文飾を持ち、袈裟擗文綾帯中央に突線を付加したものが香美郡美良布神社所蔵・安芸市伊尾木切畑出土、軸突線を持たないものが土佐山田楠目から出土している。②鉢に双頭渦巻文飾を持たないものは土佐町琴平神社・南国市田村正善、③双頭渦巻文飾を鉢にも縫にも持たないものが南国市大堀より出土している。④それ以外に香美郡下出土1点のみが流水文で扁平鉢式鐸である。また吉野川上流域の支流では扁平鉢式6区画袈裟擗文鐸が徳島県三好郡西祖谷山村櫻名の鉢神社に保管されている。

高知県東部に見られる銅鐸は③、④を除いて突線鉢2式鐸以降のものである。徳島県ではこれとは逆の現象を示しており、名東遺跡を除いて、突線鉢2式鐸以前が大部分であり、銅鐸出土量は扁平鉢式鐸でピークを迎えるものの、高知県では突線鉢2・3式鐸でピークを迎えるようである。徳島県南部の阿南市でも突線鉢2式鐸が多いようである。高知県下で銅矛は50本余りが知られており、高知県中央部では中広形銅矛・広形銅矛が多く銅矛分布の東限であり、また高知県中央部は銅鐸分布の西限であるところから、從来から九州勢力と畿内勢力の混在地域と捉えられてきた。

古代以降

古代以降については嶺北地方では堀ノ尻遺跡で若干櫛まで出土している。それ以外では松ノ木遺跡、永田遺跡、中世長徳寺跡、中近世の土居屋敷跡遺跡、中世の青磁が出土した銀杏ノ木遺跡をあげることができる。

「阿波國の駅家^城、伊予国十一、土左国十二を廐し、新たに土左国に吾椅、舟川の二駅を置く」と『日本後紀』延暦16年正月27日（797年）の条に嶺北地方の名が見え、「吾椅」が本山町寺家周辺、「舟川」が大豊町丹治川と考えられている。今のところ駅家跡は特定できておらず、また考古学的な成果も得られていない。

堀ノ尻遺跡では小規模な発掘調査が実施され、柱穴、土坑等が検出されている。調査区はトレンチ状に細長いため、遺構の配置は判然としていない。しかしながら、当該地域では古代に所属する遺物群が初めてやや纏まって出土している。7世紀末、8世紀後半から9世紀前半期の須恵器類が出土している。中には環状鉢を有する須恵器壺蓋が出土している。古代一般集落では比較的少なく、地方官衙関連で出土する傾向にあり、量的には多くないものの、高知県下でも野市町下ノ坪遺跡(池澤1998)、深洞遺跡(高橋1989)、香我美町十万遺跡(高橋1988)、土佐山田町ヒビノキサウジ遺跡で出土している。高知県下において古代を代表する遺跡から出土しているところから、堀ノ尻遺跡の全体像はまだ十分把握できていないものの、古代嶺北地方の中心的な存在の可能性が強い。

第4節 歴史的民俗的環境

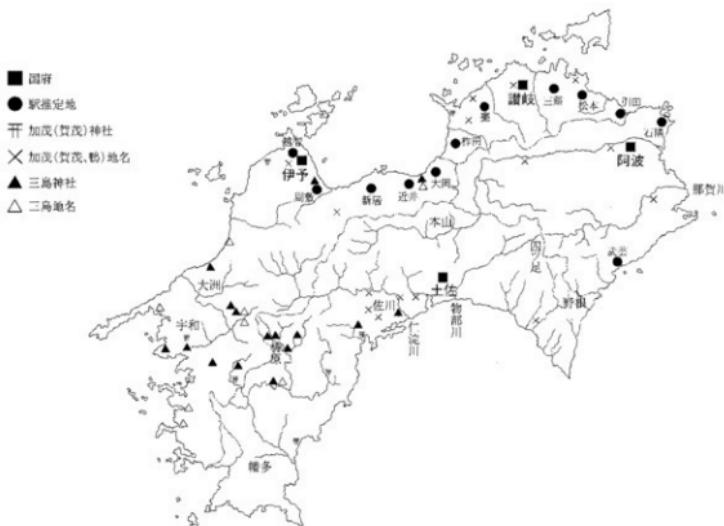
1 古代駅家について

「阿波國の駅家」、伊予国十一、土左国十二を廃し、新たに土左国に吾椅、舟川の二駅を置く」と『日本後紀』延暦16年正月27日(797年)の条に嶺北地方の名が見えるのが、文献史の初出と考えられる。

古代官道については前田和男により南海道の経路の研究が深められている。南海道の変遷は、「続日本紀」養老2年(718)「土左国言さく。公・私の使、直に土左を指せども、その道、伊豫国を経。行程迂遠にして山谷険難なり。但し、阿波国は境土相接ぎて往還甚だ易し。請はくは、此の国に就きて通路とせむことをとまうす。これを許す。」の記述がみえる養老新道、次いで延暦15年(796)に吾椅、舟川(丹治川)の2駅が設置され、愛媛県山背、大岡駅に至る経路が延暦新道となる。延暦新道の開通に伴い翌延暦16年には伊予11、土佐12の駅家が廃止されることになる。

養老以前の官道については、諸説があり①伊予国府から幡多へ大きく迂回する(岡本健児説)、②伊予国府から仁淀川伝い(吉田東伍説)、③伊予宇摩郡から猿田岬を越え現本山町を経て土佐国府へ(沼田頼輔説)、④伊予国府から西条盆地に至り四国山地を横断(藤岡謙二郎説)等が知られている。

①説の伊予国府から南宇和を経て幡多路を大きく迂回する海岸伝いの説が有力視されている。その根拠として、幾つか上げられている。波多国造(幡多)が都佐国造(土佐)より先におかれたこと、宿毛市平田に所在する曾我山古墳の存在、中筋川流域に見られる古式須恵器を多量に出土する祭祀遺跡等がその理由としてあげられよう。



第6図 古代駅家関連地区

『国造本紀』に波多国造が崇神天皇、都佐国造は成務天皇の時にそれぞれ国造になったとされる。『国造本紀』は平安時代初頭頃に成立したと今では考えられており、『国造本紀』にみられる国造は6・7世紀の国造に限らず、大宝令(701年)後の郡領への優先任用権に伴い、再編された地方名族の公的称号と考えられている。その意味で波多国造が6・7世紀の国造であるかどうかも、都佐国造より先におかれたかも再考を要する。『日本書紀』天武天皇13年(686)「土左国司言さく、大満高く勝りて海水飄蕩ふ。是れに由りて、調を運ぶ舟放失りぬ」とあり、7世紀末には土佐國、國司の名が見られ、それ以前にも天武天皇4年(676)には土左大神(一官神社)が神刀を天皇に奉る記事も『日本書紀』に見えている。文献上、波多国のは『国造本紀』のみである。元来、令制期以前の土佐の中心も土佐にあったものと考えられる。また古墳の分布・初期寺院の分布・延喜式内社の分布も令制時期の土佐中央部に集中しており、古代官道が幡多路を迂回しなければならない根拠はそれ程強くない。海運としての幡多は古墳時代から中世まで重要であったと考えられるものの、陸路としての幡多路の役割が果たしてどれほど重要視されたかは定かではない。

『延喜式刑部省流移條』の平安京から伊予まで560里、土佐まで1225里となっており、土佐への「公定」距離は不自然であるとの見解がある(足利1992)。

伊予国府から土佐を経由して阿波境までの延暦16年廃止駅数は23駅で一駅30里(現16km)と計算して690里である。平安京から伊予までの560里を加えると1250里となり、土佐への「公定」距離1225里とほぼ同数値が得られる。つまり、伊予国府を経由して阿波境までを加えたものが土佐への「公定」里数であった可能性がある。伊予から土佐境への駅数11は現在のキロ数に換算すると176km、土佐内の駅数12は192kmで合計368kmとなる。

①説の幡多路の宿毛経路では、現国道で伊予国府から宿毛まで計測すると220km、宿毛から阿波境まで250km、合計470kmとなる。先の駅数から割り出した数値368kmとは100km余りも大幅に食い違っている。確かに地勢の険しいところは里数は限らないとなっているものの、懸隔が大きすぎる。古代官道は伊予から土佐、阿波へは山間部を縫うことから、現国道よりキロ数は更に増え、誤差は広がる一方である。『延喜式刑部省流移條』の土佐への里数1225里が正確ならば、一駅30里間隔で駅家が設置されたか、または平均30里で設けられた可能性が強く、伊予国府近くの越智駅から土佐境迄は176km、土佐内では192kmはほぼ正確な数値と考えられる。他の②～④説では里数が少な過ぎるきらいがある。ただ単にキロ数の換算からすると伊予国府、松山、大洲、宇和から鷲原、須崎、佐川、伊野、土佐国府のルートが最も「公定」距離数に近くなる。確証はないものの加茂(賀茂、鴨)、三島の地名及び神社名の分布からして鷲原、宇和経由のルートも候補に追加しておきたい。考証については後日を期したい。

養老新道については、(イ)阿波の海岸沿いに南下し野根山越え(吉田・沼田・岡本説)、(ロ)那珂川を通り四ツ足峠越え(金田章裕・柴原水達男・前田和男)の2説があった。最近になって、「阿波国那賀郡武芸駅子戸主生部東方戸同部毛人調堅魚六斤 天平七年十月」(735年)の木簡が平城宮跡から出土し、「武芸駅」は現徳島県海部郡牟岐町と考えられることから、養老新道は(イ)であろう。

延暦新道の「吾椅、舟川」については異説は少なく、「舟川」は大豊町立川、「吾椅」は本山町寺家の「吾橋」ではないかと考えられている。中世の段階では長徳寺中心とした吾橋庄が寺家周辺に比定され、古代の吾椅と中世の吾橋が通じるものと考えられている。現集落のある寺家には考古学的調査が入っ

ていないため、古代駅と関係ある資料は得られていない。本山町本山の堀ノ尻遺跡では7世紀末から8・9世紀の須恵器等が出土しており、本山町での古代の中心地は今のところ寺家ではなく本山に求められそうである。もし、古代の吾椅を寺家周辺に限らず、本山町本山まで含むならば、現時点では堀ノ尻遺跡周辺が吾椅駅の可能性が強いものと考えられる。今後、寺家近辺に考古学的調査が入ればまた状況も進ってくるかもしれない。

2 中世の本山

古代末から中世の本山は長徳寺の創建された時期、本山氏が本山を支配し、長宗我部に破れるまでの2時期に大きく括ることができる。長徳寺は久安5年(1149)に創建され、また吾橋庄は紀州熊野神社に寄進されている。長徳寺は頼則、盛政の氏寺とされ、頼則、盛政の祖先は前信濃守八木朝臣とされるものの、出自は判然としないが、後の本山氏に繋がるのではないかと考えられている。本山氏の山城は本山の田井山の東端、尾根の先端部に本山城は築かれている。森林測候所、射的場により城跡は部分的に破壊されているものの、詰ノ段、二ノ段、三ノ段及び堀切が残存している。本山氏の土居は推定地として、長宗我部地検帳(天正16・17年)に「本山御土み四方ツイ地」、「高タ」、「西キト」と土居村に見え、現在の本山町五区に相当するもの、また永田村にも「北土居」と見えており、二ヶ所のどちらかが本山氏の土居と考えられている。

本山氏は本山を拠点としながらも、高知平野に進出していき、永正5年(1508)には他の山田・吉良・大平氏等と長宗我部氏の岡豈城を落城させている。本山氏は朝倉城を築き中央部を制覇していくものの、永祿5年(1562)に長宗我部氏との朝倉合戦で中央から撤退し、本山城に籠り、更に永祿7年(1564)には本山城も捨てることになる。

長宗我部氏は天正3年(1575)に土佐を統一後、天正13年には四国を統一するが、すぐ豊臣の征伐にあり土佐一国を安堵され、天正15年から19年までに土佐の検地を実施する。本山の検地は天正16年から17年にまたがって行われており、吾橋の名称は消滅し寺家村となり、長徳寺の支配は狹められ、「山之坊寺領」として6反余りが寺領となっているだけで、他の大部分は「散田」として長宗我部氏に掌握されることになる。寺家には当時の小字「ホノギ」が今まで継承される小字が残存している。松ノ木遺跡周辺の中世のホノギは北側に「国木」、東側に「松ノヲキ」が見られるものの、調査対象区では現ホノギは「ツキアイ」となっているものの、中世ホノギは確認できなかった。今回の調査対象区の1区で中世墓と考えられるものを検出しているものの、地検帳上では手掛けりとなるものは得られていない。

3 本山町の民俗

高知県は民俗の宝庫として有名である。中でも山間部では平野部の都市部とは違い、焼畑等の民俗例が多く残されている地域である。発掘調査報告書と直接民俗例は関係ないものと考えられるものの、その地域の歴史的背景を考える上で民俗を取り入れることにより、より立体的な把握の一助になればと、新たに民俗の項を設けた。しかしながら、研究分野外のため、民俗学的方法論、位置付けについては不十分と言わざるを得ない。本山町の民俗調査は大谷大学民俗学研究会により実施され、報告書『本山町の民俗』(1974)が発行されている。その成果を取り入れ、また町史を参考にして本山町の民俗の概略を取り上げたい。

本山町は吉野川流域に平野部を形成するものの、大部分が山間部であるところから、水田に乏しく、戦後迄は焼畠が残っていたとされる。焼畠は切畠(キリハタ)と呼ばれ、アワ、ヒエ、ソバ、小豆、トウキビ等が栽培されていた。火入れの時期により作物の種類は違い、山林を切り開いた後、春の火入れはアワ、ヒエ、6~8月の火入れにはソバを作っている。2年目にはミツマタ、10年程で地力が落ちた後はスギ、ヒノキの植林を行っている。

中世の長宗我部地検帳には切畠の作物として小麦、大麦、エンドウが挙げられるが、主に小麦が栽培されていたようである。江戸時代にはアワ、ヒエ、小豆、大豆等が江戸時代を通じて作付けが行われている。

水田耕作に伴う民俗例として、お作陪様「オサバイ」を挙げることができる。高知県下で通常に見える田植えに伴う、田の神に捧げるものと考えられる。畔、水口に柿の木、栗の木を立て、柿の葉または柴を敷き、お供え物を捧げる。地方により、供物は違ってくるものの、本山では干し柿、米、ちりめんじゃこ、神酒などを供える。また「虫送り」として若い娘が好きな男に田の土を塗り、また田植えの際に早乙女が作男に泥を塗ると、夏病みをしないといわれる。高知市長浜の若宮八幡宮でも奇祭として神田祭り「ドロンコ祭り」が有名である。若宮八幡宮の祭りは400年ほど前から始まったとされるが、本山町との関連は不明である。

狩猟については、イノシシ猟は4~5人で11月から2月頃まで猟犬を連れて山に入る。それぞれの分担により獵を行ふ。「寂屋」、「ヌタバ」から「走り」の獵道に待ち伏せて、鉄砲で射る。分配は「イドリ」と称して射た人が「胃」か頭を取る。興味ある事象として、山の神にはイノシシの左右どちらかの耳、尾を捧げる風習が認められている。鉄砲猟以外に、ワイヤーによる仕掛け猟も存在した。イノシシの通り道にワイヤーを仕掛けるものである。イノシシ以外には山鳥、シカ、ウサギ等も狩猟の対象となっている。イノシシは味噌汁、味噌炊きにする。

川漁はアユ、ウナギ、マス、ハヘが江戸時代から有名であった。マス、ハヘについては江戸時代に伊勢から取り寄せて放流したものとされる。アユは魚酢として保存食糧にする。9月につくり、春先まで食べている。酢の意味は塩・糟などにつけ、発酵させて酸味をつけた魚、また、発酵させた飯の中に魚をつけこんだ保存食である。川漁は近年は殆ど行われていない模様である。近傍の早明浦ダムでレジャーとして外来魚ブラックバスの釣りが盛んな程度である。

伝承・伝説としては半家伝説、弘法伝説、エンコウにまつわるもののが採集されるなど、本山町の民俗は基本的には四国山間部に通常に認められる民俗例が多く採集されている。

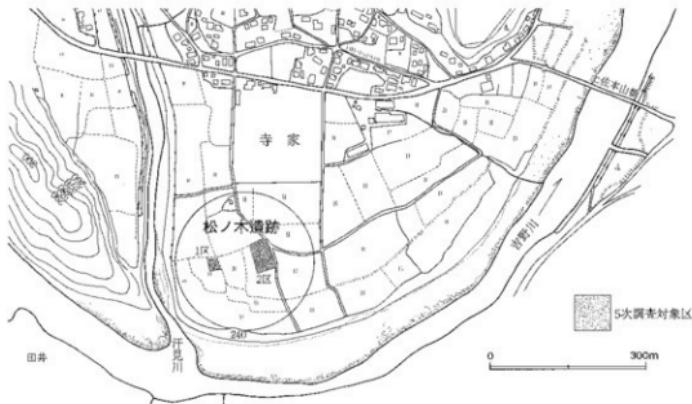
第5節 松ノ木遺跡の各調査の概要

松ノ木遺跡は平成2年3月に1次調査が開始されてから、平成7年度までに5度の調査が実施されている。調査内容については別表の通りである。今までの調査成果の概要を取り上げる。

1 第1次調査(『松ノ木遺跡I』1992)

平成2年3月29日より同年4月14日にかけて調査を行った。農道改良工事中に発見されたもので、調査面積60m²の調査を行っている。当初、縄文時代後期の住居跡ではないかと考えられたものの、最終判断では自然の落ち込みへの遺物投棄と修正された。遺物は縄文土器、石器がコンテナ箱にして約40箱程出土した。

高知県西部の宿毛貝塚を標式とする宿毛式が若干出土し、大部分の土器群は宿毛式に後続する一群と考えられ、報告書で「松ノ木式」が設定された。南四国内でも僅かではあるが、こうした一群の存在は認識されていたものの、型式設定までには至っていなかった。瀬戸内の愛媛県側で既にこうした一群は「小松川式」として出土していたものの(大飼1985)、その論文では宿毛式に並行する古い一群のみが報告されており、松ノ木遺跡調査段階では小松川式と松ノ木式とは時期差があるものと見做された。しかし、小松川遺跡では宿毛式に並行するものだけではなく、松ノ木式に相当するものが既に多量に出土していたにも関わらず、部分的に『小松町誌』(1992)に取り上げられているだけで、大部分は報告されずじまいとなっていた。こうしたことから型式名の先行取得は松ノ木遺跡に譲ることになる。小松川式は宿毛式から松ノ木式の2時期にわたり、過渡期のものも含まれており、一方、松ノ木遺跡出土の土器群はより純粹に一型式の内容を示していることから、一般的に「松ノ木式」と研究者間で周知されるようになった。西日本の悪しき研究方法で先の型式名を尊重せず、本来は先取権を尊重し「小松川式」の研究を踏まえて、「小松川式」の深化を行い再度「小松川式」の型式の名を踏襲し、安易な型式名



第7図 松ノ木遺跡周辺図

設定は控えるべきであった。本来「松ノ木式」の設定は混乱を招く元凶となる恐れがあったものの、しかし該期の四国土器論は余り注目されておらず、近畿圏では「四ツ池式」の設定が行われ、福山KII式に後続するものとして、該期の研究が丁度火ぶたを切って落とされたばかりであった。松ノ木遺跡でタイミング良く新たに多量に出土した土器群が「四ツ池式」との絡みで「松ノ木式」が注目された。そして「小松川式」の設定は時期尚早とも言えた。今、大多数の研究者間では「松ノ木式」として理解しており既に独り歩きをしている状況で、「小松川式」の型式名を使用することは逆に混乱を招くだけであるため、ここでは敢えて「松ノ木式」の型式名を使用する。

松ノ木式は縄文時代後期前半の特徴的な一群で、深鉢は口縁部の拡張にその特徴を読み取ることができる。口縁部は内面に肥厚させることができて多く、所謂「内面施文」となっている。肥厚した口縁部に沈線1条を巡らせ、斜行する短沈線のキザミを連続的に施す。また何単位かの突起を持ち、突起は人間の耳状を呈している。口縁を巡る沈線は1本を基本とするものの、2本沈線となるものも、若干認められている。また斜行短沈線以外にも縄文を施すものも認められている。

頸部は基本的に無文となるものが多いものの、突起部分の下に垂下する沈線、または梯子状の文様となるものが認められている。こうした流れは宿毛式からの系譜に繋がるものであり、頸部無文帶の発達と共に、頸部に僅かに文様を残すものである(前田1994)。

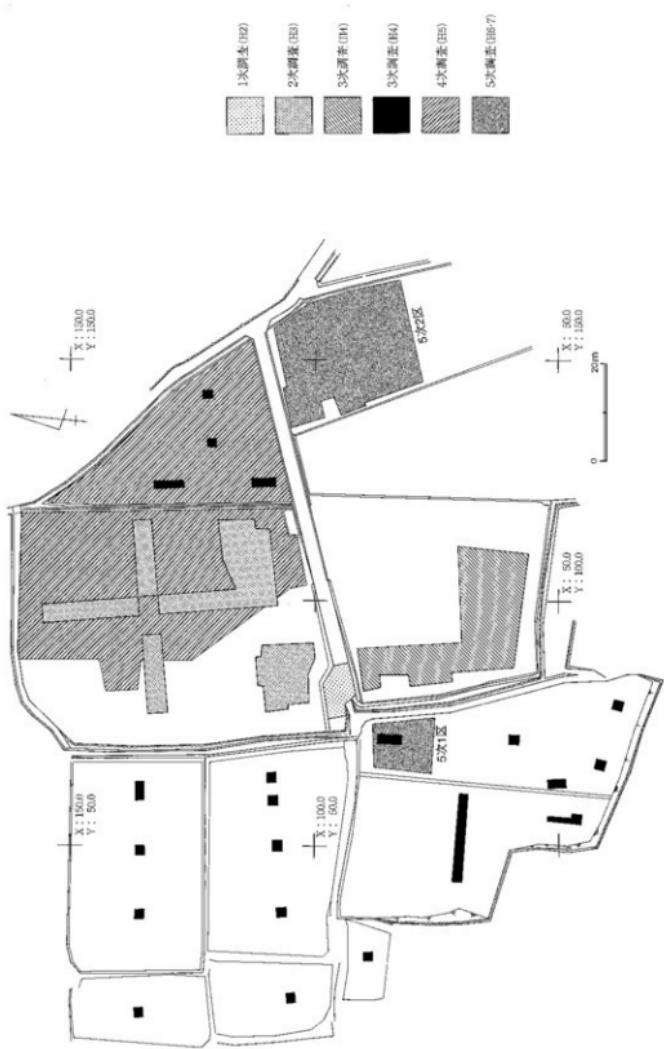
胴部文様は沈線文系、磨消縄文系の2つに大きく分けることができる。充填縄文で単位文様が若干崩れかかったものもある。浅鉢については深鉢との文様構成に重複関係にあるものは少なく、重弧文、重三角形の単位文様を交互に配置するものが多く出土している。

松ノ木遺跡では深鉢、浅鉢以外にも無文土器、粗製土器等の器種構成に多様化が認められ、特に粗製、無文土器の比率が前代より多くなるようである。

石器は比較的少なく、石器組成で松ノ木遺跡を検討するには不十分な状態であった。石錐が最も多く、河川漁との関係が考えられるものである。石錐は極端に少なく、一見縄文生業を考える上で重要な石器組成に見える可能性があるものの、しかしながら、微細遺物については、本来的にその集落で保有をしていなかったのか、保有していたにも関わらず、発掘調査で出土しなかったのか、また地点を違えていたために出土しなかったのかの見極めが重要と考えられる。

表2 松ノ木遺跡年次別調査内容

調査次	調査年月日	調査面積 (a)	調査担当者	報告書 (発行年)	生年時代	出土遺物	主要出土遺物	備考
1次調査	H23.29～H24.1.4	60	山原恵三	松ノ木遺跡I (1992)	縄文時代後期・ 前期	土器焼成場	後期土器群	
2次調査	H23.6.3～H23.7.20	550	出原恵二	松ノ木遺跡II (1992)	縄文時代後期・ 弥生時代後期	土坑	弥生住居	
3次調査I	H4.10.13～H4.12.23	450	前田光雄	松ノ木遺跡III (1993)	縄文時代前期・ 中期・後期	宿毛式期住	前期～後期の 上器群	
3次調査II	H5.3.1～H5.3.19	100	吉成承三	松ノ木遺跡III (1993)	縄文時代後期	土坑	後期土器群	
4次調査	H5.11.5～H6.1.31	2200	出原恵三・前田光雄	松ノ木遺跡IV (1996)	縄文時代後期・ 弥生時代後期・ 古墳物類	土坑	後期土器群	弥生～古墳 住居
5次調査	H6.11.28～H7.5.10	550	前田光雄	松ノ木遺跡V (2000)	縄文時代前期・ 後期・古墳物類	土器焼成場	前期～後期の 土器群	弥生～古墳 住居



第8図 各年度別調査区配置図

石器の中で注目されるものに「打製石包丁」がある。石器名称自体に問題を孕んでおり、所謂弥生時代の「打製石包丁」と全く同じものなのか、または形態が極めて似通っているところから単純な形態論で名称設定されたのか、機能が「石包丁」と同様と想定されているところから名称設定されたのか、有効な分析、研究の進展が認められないにも関わらず、「打製石包丁」の名称には疑問を感じる。第3次調査で同様の形態で5cm足らずのものが出土しており、到底「石包丁」の機能が想定できないものも出土しており、また形態的にも弥生時代の「石包丁」とは明確に違うこと、機能的にも穀物収穫具としての使用の痕跡は認め難く、製作技法も違うなどの相違点が多いために、第5次調査の本報告書では、機能等については今だ判然としないところから「抉入石器」と報告してある。

2 第2次調査(『松ノ木遺跡II』1992)

平成3年6月3日から同年7月20日迄の調査を行っている。第1次調査の際に多量の縄文土器が出土したことを受け、周辺域の遺跡の展開を把握するために、土器捨て場の北側部分に調査区を設定してトレンチを入れている。調査面積は550m²である。縄文時代の遺構は希薄で土坑を2基検出したに留まる。縄文時代以外の遺構として弥生時代から古墳時代にかけての住居跡3軒、溝1条を検出しており、搬入土器も認められ該期では注目される。

3 第3次調査(『松ノ木遺跡III』1993)

3次調査は2回に分けて調査を実施した。1回目は平成4年10月13日から同年12月23日迄と、2回目は平成5年3月1日から同年同月19日迄である。2回目の調査は周辺域のテストピットで遺跡の広がりの確認を目的として行われた。1回目は450m²の調査を「土器捨て場」の南側部分の水田に調査区を設け、遺跡内容の把握に努めた。ここでは主に1回目の調査について取り上げる。

3次調査での成果は、宿毛式期の竪穴住居跡1棟の検出である。平面形2.8×2.5mの小形の住居跡S T 4で、掘り込みも浅く、15cm足らずで、上部は後世に削平を受けている可能性がある。住居跡には炭化材が残存しており、また中央部分には中央柱が立ったままの形で出土しており、焼失家屋であることが判明している。遺物は縄文時代後期前半に含まれる宿毛式、石鎌4点が出土している。高知県においては縄文時代の明確な住居跡は極めて少なく、本住居跡が唯一と考えられる。

調査区北端では土器捨て場の南側肩部分を検出しており、松ノ木式に含まれる土器群が纏まって出土している。他に遺物としては、縄文時代前期から晩期までの遺物群が包含層から出土しており、瀬戸内編年で把握できる土器群が大半を占めている。また玦状耳飾も2点出土している。

縄文時代以外のものは少なく、S X 3としたものは弥生時代後期終末から古墳時代前期初頭の円形周溝墓の可能性のあるものが調査区西端の崖線際で検出されている。

4 第4次調査(『松ノ木遺跡IV』1996)

平成5年11月5日から平成6年1月31日まで調査を実施した。第2次調査の調査区の東半分と更に東隣りの三角地の水田を調査対象区とした。各々I区、II区と調査区名を付し、調査面積は合計で2200m²である。I区では第2次調査からの溝S D1の続きと弥生時代から古墳時代の住居跡5軒検出している。住居跡は上層が削平され遺存状態の悪いものが多い。II区でも同時期の住居跡2軒と土坑群を検出し

ている。

縄文時代に関しては、Ⅱ区SK40で宿毛式から松ノ木式にかけての土器群が纏まって出土している。土器捨て場以外から縄文時代後期前半のものが纏まって出土したのは初めてである。型式学的には宿毛式、松ノ木式の両方の要素を含んでおり、宿毛式から松ノ木式に漸移的に変化することが分かる資料群である。



第9図 松ノ木遺跡遺構全体配置図

第6節 調査経緯

高知県長岡郡本山村寺家に所在する松ノ木遺跡は平成2年に発見されて以来、今回の調査で5回の調査を実施してきた。

各調査の内容はここでは逐一取り上げないものの、高知県下において縄文時代の調査は他の時代に比して、調査件数も少なく、また特に中央部では本格的な調査事例は少なかった。

第1次調査に於て、「土器捨て場」から縄文時代の遺物が多量に得られたことから、松ノ木遺跡では南四国の縄文文化を解明する上でまだ多くの貴重な資料が得られる可能性が高いことから、平成6年に第5次調査を実施することになった。

平成2年に発見の契機となった低位段丘面との境をなす崖線に所在する「土器捨て場」については、それ以來調査を実施しておらず、範囲確認、遺存状態の確認を行った。今回の調査では土器捨て場を1区と調査区名を付した。

また「土器捨て場」以外にも中位段丘面の平場にも調査区を設けた。松ノ木遺跡の今までの調査では「土器捨て場」の遺物量からすると、中位段丘面でも縄文時代の遺構等の広がりが予想された。しかしながら、弥生時代・古墳時代の遺構・遺物は多く確認できたものの、縄文時代に含まれる遺構・遺物は予想外に少なかった。

そこで、遺跡の広がりを更に追究すべく、中位段丘面の東南部分に調査区を設けて2区と調査区名を付し、調査を実施した。

平成6年11月28日(月)から平成7年3月31日(金)まで調査を実施したものの、「土器捨て場」からの遺物量は膨大な数に上り、年度内では終了せず、次年度送りとなった。平成7年度は平成7年4月3日(月)から平成7年5月10日(水)迄、調査を行い、実働日数93日間行った。整理作業は平成7年5月11日から平成12年3月31日迄の約5年間実施した。

発掘調査、整理作業は国庫補助を本山村教育委員会が受け、実施したものである。

第7節 調査方法と発掘経過

1 調査方法

松ノ木遺跡は今回の調査が5度目の調査となる。松ノ木遺跡の縄文時代の内容を把握するための学術調査を実施したものであり、特に平成2年度の調査で検出された「土器捨て場」について今回の調査は重点的に行った。また、中位段丘面の平場についても調査を実施した。

調査区名

「土器捨て場」を1区、中位段丘面の平場を2区とした。

1区の調査面積は約125m²、2区の調査面積は約400m²である。

グリッド

公共座標に則らず、松ノ木遺跡独自のグリッド設定を行っている。前回までの調査のグリッドを踏襲しており、小グリッド4×4mを基本として、東西ラインをA、B、C・・とアルファベット大文字、南北ラインを1、2、3・・とアラビア数字を用いた。大グリッドは100×100mで大グリッド単位でI、II、IIIのローマ数字を付した。

1区は大グリッドでIIIに含まれ、東西W～Z、南北3～6グリッドに納まる。表記する際には小グリッド名にIIIを冠しIII W3、III W4と表記すべきだが、本報告書では煩雑なため、本文中及び遺物観察表では大グリッド名のIIIは省略している。

2区は大グリッドI、IIにまたがり、東西II O～II U、南北49、50、及び東西I O～I V、南北1～6グリッドに含まれている。

発掘方法

1区の「土器捨て場」は、縄文時代後期前半の廃棄帯である。急傾斜地で層位は極めて煩雑であり、層位毎の遺物取り上げは困難なため、便宜的にある程度の深さまで掘り下げた時点で上位から下位へI層、II層という具合に遺物取り上げを行った。報告書の段階ではI面、II面・・と報告している。しかし、平面的な掘り下げのため概略の層位区分が時期差を表しているものではない。最終的にはVII層(面)までの層位区分を行った。遺物の多い層位はVI、VII層(面)であった。

遺物は1/20の微細図を作成し、No1から通し番号でNo3234までが遺物番号付遺物である。但し、碎片等についてはグリッド、層位でまとめて取り上げを行っている。

石鏃、石器剥片、炭化物、炭化種子等の微細遺物についてはグリッド、層位単位で土壤採取を行い、現地で水洗選別を行った。その結果については、層位毎の遺物点数の統計を報告書に掲載してある。縄については、番号付も含め、現地で水洗を行い、石鏃、叩石等は抽出した。

最終段階で調査区裏面の層序区分を行い、北壁面については分層を行った後、更に調査区を50cm幅で拡張を行い、層位毎の遺物取り上げと、大形土器破片については遺物番号を付して取り上げている。拡張区の層位はI、II層(面)とは違い、明確に層位区分ができたため、アラビア数字を付し1層から140層まで西壁、東壁を含め、分層を行った。本文及び遺物観察表等では拡張1、2・・層としたもの

が該当する。また拡張区から採集した土壤についても水洗選別を行い、層位毎の遺物量を統計的に反映できるようにした。

2区については弥生時代後期後半から古墳時代初頭の住居跡、土坑等の遺構が検出されている。住居跡はS T、土坑はS K、溝はS Dの遺構毎に略記号を付し、前回の調査からの続き番号をついている。住居跡はS T 12から15までの4軒、土坑はS K 72から77までの6基で、溝は1条のみでS D 1が前からの続きである。遺物は遺構別毎に番号を付している。遺物包含層からの遺物は少なく、若干であるが、縄文時代の遺物が別の時代の遺構に混入するものが僅かに認められた。これらについては報告書ではその遺構に含めず、一まとめで報告した。但し、遺物観察表には出土地点は明示してある。

2 発掘経過

平成6年(1994年)11月28日(月)より調査を開始する。平成5年に低位段丘部分の試掘調査が3次調査として行われており、そのTR 10より縄文時代後期の遺物が比較的纏まって出土しており(『松ノ木遺跡Ⅲ』1993)、平成2年に調査された「土器捨て場」の続きと考えられ、その部分の水田に調査区を設定する。調査区名を1区とする。

また、同じく平成5年の11月に実施された中位段丘面での弥生時代、古墳時代の遺構が検出できた平場部分の南東部に2区を設定した(『松ノ木遺跡Ⅳ』1996)。

2つの調査区を同時進行で調査を実施した。1区の「土器捨て場」の調査については、当初の予想以上に遺存状態は良く、多量の遺物が出土している。

1区は中位段丘面との崖線際にあり、大きく崖線がカットされており、高さ2m程の石垣が築かれている。調査区の中央部分では水田耕作土を除去すると既に遺物包含層は削平されており、弧を描くように縁辺部に旧地形が残存しており、「土器捨て場」本体までには調査を進めていく中で、削平されていないことが判明した。

グリッド杭を打った後、旧地形の残存している北側部分の「土器捨て場」の遺存状態の把握を最優先して調査を進めていく。当初、平成2年度の1次調査での「土器捨て場」の深度は深い所で60~70cm余りで、比較的浅い面で遺物が多量に出土していた。今回の調査でも上層部分からやや纏まって遺物が出土するものの、I層面、II層面ではやや遺物は希薄な状態であった。

土壤は河川堆積を示すもので、黄褐色シルト質土壤で部分的にサブレンチで深層確認をしながら掘り進めると、腐植土起源の暗褐色シルト質土壤が観察され、遺物が多量に含まれていることが徐々に判明し始めた。しかしながら、数度のサブレンチでの調査でも、基盤層に届くことはなかった。

1区の南側部分についても同時に掘り下げを行っていくと、南側方向に傾斜を見せており、上層部で中世の土器が出土した。更に調査を進めていくと表土面から深さ1m20cm程で大砾の石組みが確認され、更に石組み内は落ち込みが認められ、中から鉄製品が出土し、中世の墓と考えられた。遺構は更に南側に広がっているものの、最終的には今回の調査では拡張調査を行わず、埋め戻しを行った。

2区については弥生時代後期後半から古墳時代初頭の住居跡を4軒、土坑、以前の調査で確認されて

いた溝S D 1の延長部分を検出した。住居跡の中でも特にS T 14では高知県中央部の弥生時代終末から古墳時代初頭の土器と共に、徳島県東部に分布域を持つ、所謂「東阿波型壺」が纏まって出土していることは注目される。

2区については縄文時代の遺構は希薄で、特に遺物も少ないような状況であった。若干の石器、及び縄文晩期の土器等が後世の遺構に混入して出土している程度であった。

年末は12月27日(火)まで調査を行い、翌年に調査を持ち越すことになった。正月明け、屠蘇気分もまだ抜け切らない、平成7年(1995)1月5日から調査を再開する。年明けの調査開始早々から嶺北地方は本格的な冬を迎えることになり、高知平野部から嶺北の山間部に入ると雪に見舞われることもしばしばであった。

「土器捨て場」は当初の予想以上に深く、多量の遺物が出土する場面を迎えた平成7年(1995)1月17日(火)、早朝5時40分頃、地震が襲う。高知ではここ数年来経験のない揺れを感じる。出勤前のテレビ放送では神戸を震源とする地震であると報道されていたものの、被害状況は分からずじまいであった。現場でも早朝の地震について話は持ち切りであった。しかし、被害状況は誰も詳しく知らなかつた。みぞれ混じりの天候の中、昼食でいつもの喫茶店に入ると、テレビでは神戸の地震後の大火が生中継で流されていた。マグニチュード7.2の大地震が阪神方面を襲い、死者は2千名に達することであった。時間が経つにつれ被害は広がるばかりで、阪神大震災は6千名の命を奪つたことになる。戦後生まれの世代にとっては初めての大規模な天災だった。

調査は1、2、3月と継続して行った。「土器捨て場」のIV、V、VI層面に調査が進むにつれ、遺物量は増す一方であった。サヌカイト刷片、石器等も多量に出土し、土壤の採集を行い、水洗選別を行う。高知県では珍しく、完形品に近い土器も纏まって出土する。ある程度遺物出土状況が佳境に入った2月25日(土)、現地説明会を開催し、100名程の見学者が訪れる。

3月31日(金)まで調査を行うものの、「土器捨て場」は予想以上に深く、基盤層にいつ辿り着くか分からない状態であった。3月末で調査を終了する予定であったものの、状況的には無理であると、調査中途で止めることができず、年度をまたがって調査を継続することになる。

4月3日(月)から更に継続調査を行う。4月10日(月)に最下層まで辿り着く。自然礫層が顔を出し、基盤層であることが判明する。最深層部で表土から3mを測った。

調査区より北側部分に及び西側部分に「土器捨て場」は更に広がっており、今回の調査でも「土器捨て場」の全容の片鱗しか掘め切れずじまいであった。

その後調査区の壁面の土層分層、更に分層発掘を行い、調査が終了したのはもう春の5月10日(水)であった。実働93日の学術調査であった。遺物の量はコンテナ100箱を軽くオーバーし、南四国では縄文時代としては最大量であった。

3 整理方法

整理作業は調査が終了次第、開始した。遺物の洗浄、注記、遺物接合の基礎作業を平成8、9年度まで行った。

注記は高知県では年度の次に県内での発掘順番、市町村名の頭文字、また遺跡名の頭文字を取る様にしている。松ノ木遺跡は「94-25MM」となり、更に5次調査であることを表記するために「V」を付け、「94-25MMV」とした。また更に調査区名を表すために、1区、2区も付け加えてある。その後に遺物番号付きのものについては遺物番号、一まとめで取り上げたものについてはグリッド名と層位を付けてある。

遺物の抽出は基礎整理作業が終了後は、報告書掲載用遺物の抽出を行った。遺物は膨大な数になるため、到底全ての遺物を網羅できるわけではなく、縄文土器については基本的に文様構成の分かる大形破片を主とした。また特徴的な文様を有するものについては極力掲載するように努めた。無文土器、粗製土器については形態、整形等を考慮し、片寄ることなく、掲載してある。その意味で分類毎の多寡により比例的に掲載したわけではない。土器底部についても同様である。突起、注口土器等の装飾性の強い土器片については極力実測図に取り上げている。

縄文土器は実測図と拓本図に大きく分けることができる。復元実測の可能なものについては、実測図を基本とし、無文土器、粗製土器、破片については拓本図とした。なお復元実測でも土器の傾きにより、その文様が把握しづらいものについては、拓本図も併記してある。土器底部、装飾性の強い突起等については拓本図では判読不能なため、実測図となっている。

縄文土器の掲載点数は約1000点である。

石器については大部分を掲載するように努めてある。実測図に掲載しなかったものについても観察表には法量等は取り上げた。但し、剥片類については逐一法量を取ることはせず、層位毎の重量による。

石器の実測図は約950点余りを掲載した。

炭化物等の自然遺物についても同様で、ここに取り上げることはせず、総量を層位毎に取り上げた。

本文中の挿図で遺物ドット図(第19、22図)、垂直分布図、接合図(第23図)はマック堅田のソフトウェアを利用した。現場での遺物微細図からデジタイザーと呼ばれる座標軸読み取り器で、遺物のXY座標をデジタル化し、レベルは個別に現場での測量値を手入力を行った。しかしながら器械操作に不慣れなためか、余り有効に活用できなかった。

平成10年度内に土器拓本、実測、石器実測等を基本的に済ませ、平成11年度に実測図点検と並行させ、トレースを行った。また遺構トレースも同時に取りかかった。本文執筆については、平成11年から徐々に書き貯めたものの、本格的に取りかかったのは平成12年1月からである。間欠的に作業を行ったため、最初のものと最後の方で仕上げたものとでは内容に齟齬をきたしているのではないかと危惧している。

第Ⅱ章 1区調査成果

第1節 繩文時代土器捨て場

1 層序

土器捨て場の土層観察は調査区の北壁、西壁、東壁で行った。基本土層観察は北壁で行い、西壁・東壁は北壁と整合性が取れるようにした。土器捨て場の調査最終段階で北壁面については分層を行った後、更に調査区を50cm幅で拡張を行い、拡張区として層位毎の遺物取り上げを行っており、各層序の遺物のあり方を検討してみたい。

土器捨て場は1次調査で落ち込みの先端部分を確認しており、また3次調査では南側の肩部分を検出している。今次調査では東壁部分では約2.6mの幅で深さ約0.8mを確認し、溝状に西に走り、調査区の西端部分では大きく自然の落ち込みは開放し、西方向に急激な傾斜を見せている。北壁はほぼ土器捨て場の長軸方向に半蔵したような形になつておらず、調査区外の西側部分へと更に土器捨て場は展開する。西北隅での深さは現水田面から3m程にも達しており、層序は極めて煩雑であった。北壁では1層から62層まで、西壁では63層から78層まで層名を付している。個々の層位についての記述は表3に掲載してある。

北壁での土層観察では、落ち込み部分に土層が流れ込む堆積状況を示しており、上層部分では10層辺りまでは帯状の堆積状況を示しているものの、それより下層はブロック状となり層位が入り乱れるような状況であった。全ての土層が基本的には河成起源のシルト質土壤を基本としており土器、石器、炭化物等の遺物が多く認められた。基底層は砂質土となり大形の礫が出土し始める。

各層により遺物の多寡は認められるものの、縄文時代後期前半の遺物群を主体としており、それに混じり縄文時代前期、中期の遺物が出土している。出土した後期前半の縄文土器は型式的に明確に分かれ出土する傾向はない。第14図から第17図に各層位毎に出土した遺物をピックアップしたものの、上層から下層まで宿毛式が満遍なく出土している。5、6層の帯状に堆積した層位からは宿毛式を主体とし、石鎚、石錐等が比較的續まって出土している。最下層の33層からも宿毛式を主体とし、松ノ木式の浅鉢、石鎚、石錐が出土している。しかし、北壁拡張区から出土した土器群は型的には混在しているものの、若干の傾向として調査区全域の出土遺物のレベルからみると松ノ木式の後続型式である縄文時代後期前半のなつめの木式並行の土器群が若干であるが、上層より出土する傾向にある。

第18図の各層位毎の接合関係を見てみると、拡張区出土の3046、3163、3219、3273、3309、3455、3500、3642の土器群は離れた層位間で接合関係にあり、土層が移動していることを顯している。19、28、31、33、47、60層出土の土器の接合関係からみていくと、シルト質土壤のため地滑り状に土壤の移動があったものと考えられる。これらの下層部分の土層は、自然の落ち込みが急傾斜で崩落するよう地滑りを起こしていることを顯しているものと考えられる。更にある程度埋まった状態で、緩やかな窪地となり上層部分の土層が帶状に堆積したものと考えられる。西壁では肩部分の土壤が数回に亘り崩落したことが分かり、上層になるにつれて水平堆積に変化していく徐々に安定していく様子が看取できる。

なお、北壁西側部分で土壤サンプリングを行い、花粉分析、プラント・オパールの抽出の分析を依

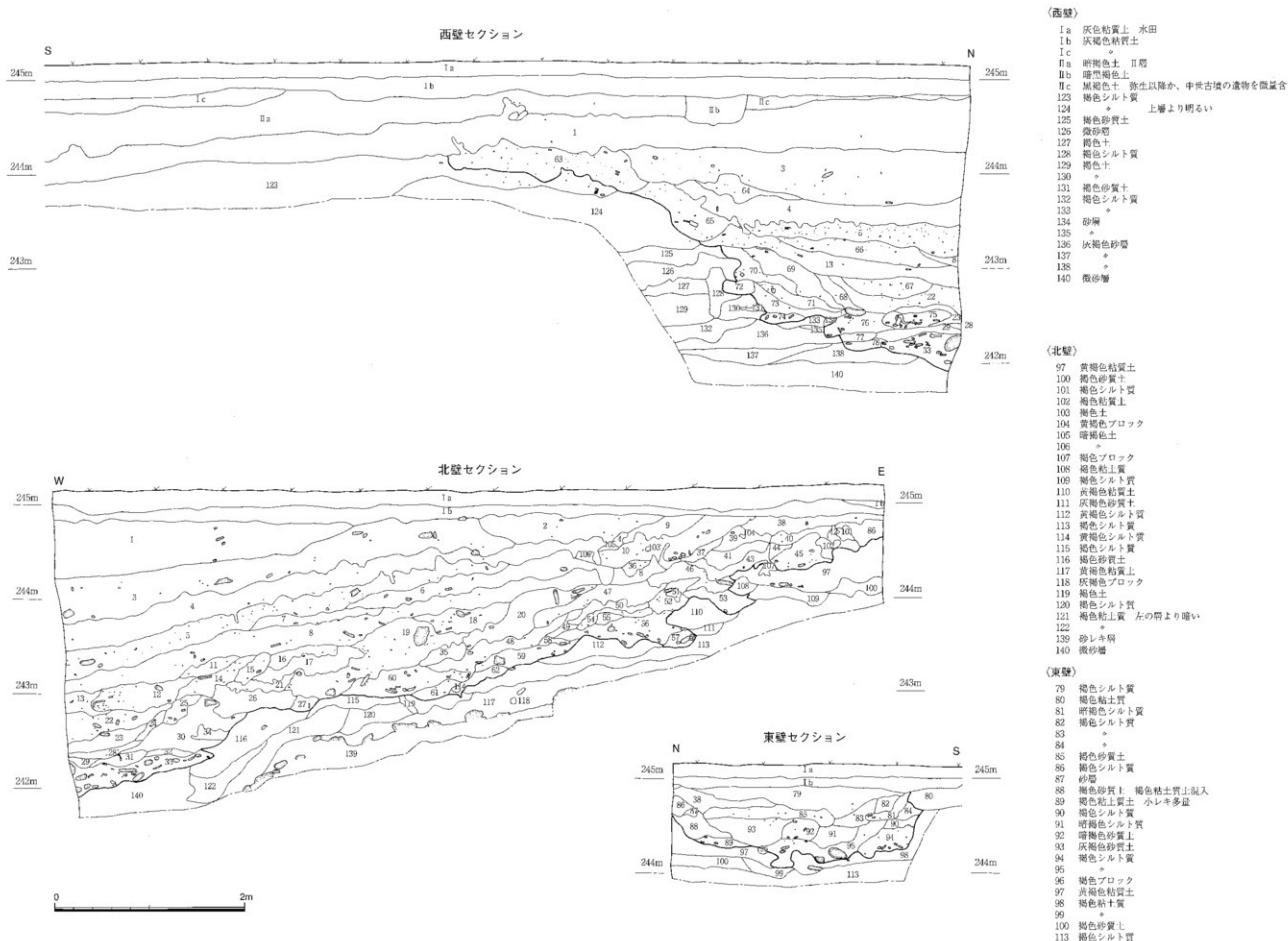
頼したもの、シルト質のため良好なデータは得られていない。3層からは塊状の赤色顔料が出土しており、分析の結果からベンガラの分析結果を得ている。

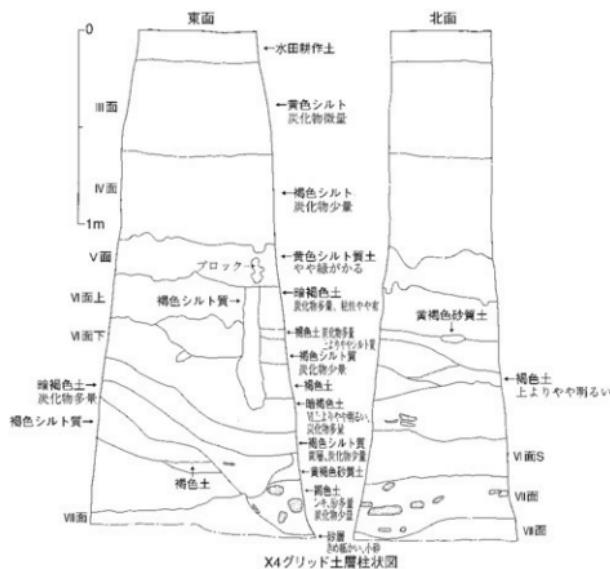


第10図 土器捨て場全体図

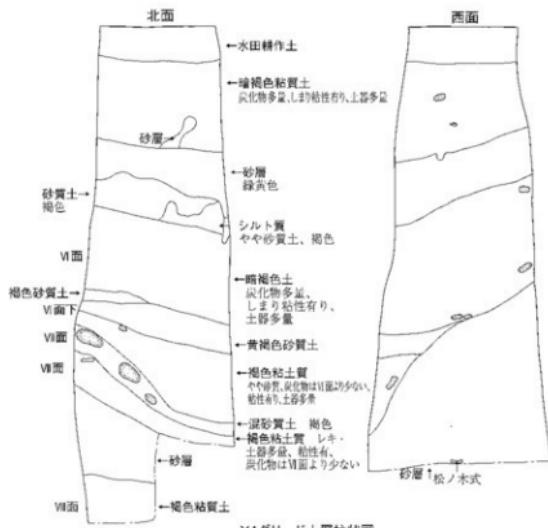


第11図 土器捨て場遺物出土状況図





X4グリッド土層柱状図



Y4グリッド土層柱状図

第13図 土器捨て場土層柱状図

表3 拡張区層別出土遺物一覧表

拡張区層名	土器範例	出土品No.	土器接合関係	出土石器%
北壁1層	黄褐色シルト質土	3541		石鏃104、197、204、未651、剥片429
北壁2層	暗褐色土	3456、3603		石鏃26、50、160、283、R.F.409
北壁3層	褐色シルト質土、やや風みを帯びる	1100、3006、2230、3257、 3258、3317		石鏃14、56、112、262、未612、 未674、未291、未222、石錐1点
北壁4層	黄褐色シルト質	1915、1031、1133、3235、 3666		石鏃105、195、227
北壁5層	暗褐色土	1107、1119、3004、3026、 3190、3225、3261、3414、 3416、3418、3472、3590、 3609、3637、3546、3647		石鏃5、8、10、49、80、133、 214、219、235、237、323、未 050、未087、未092、未109、未 124、未133、未136、未176、未 232、石錐1点
北壁6層	暗褐色土、上層よりやや 明るい	3068、3047、3170、3434、 3439、3454、3463、3622、 3639	3047は19層と接合	石鏃18、19、40、58、89、139、 168、217、245、300、未011、未 031、未038、未083、石錐332、 357、R.F.407、剥片446
北壁7層	褐色土			石鏃55、56、277、未002、未195
北壁8層	暗褐色土、上層よりやや 明るい	1106、2016、3273、3435、 3578、3729	3273は35層、47層と接合	石鏃53、75、121、136、196、 211、244、263、285、未043、未 071、未075、未102、未128、未 139、未141、未209、石錐356、 印石454
北壁9層	褐色シルト質土			
北壁10層	暗褐色土、炭化物多い	1016、3120、3514、3577、 3630、3636、3712		石鏃83、95、337、未007、未 119、未179、未235、剥片426、 石錐1点
北壁11層	褐色シルト質土			
北壁12層	暗褐色土、上層より更に 黒みを帯びる。植物、灰 化物多い。	1049、3204、3252、3346、 3358、3382、3415		石鏃308、石錐353、剥片433
北壁12、13層	部分的に12、13層を混在 して遺物を取上げてしま う。	1602、3310、3604		石鏃57、70、102、111、135、 141、145、148、208、234、 240、260、261、未056、未070、 未175、未307
北壁13層	暗褐色土	3134、3604		
北壁14層	暗褐色土	1058、3136、3500、3673	3300は12層と接合	
北壁15層	暗褐色土			
北壁16層	褐色シルト質土			
北壁17層	褐色土			
北壁18層	褐色土	1037、3265		石鏃51、120、剥片428
北壁19層	暗褐色土、炭化物多い。	3047、3271、3309、3329、 3420、3568、3642、3644	3047は6層、3309は47層、 3642は21層と接合	石鏃44、171、241、未155、挿入石器 348
北壁20層	褐色土	3665		
北壁21層	褐色土、炭化物微量			石鏃144
北壁22層	褐色シルト質土	1102、1134、2319、3356、 3479、3500、3588	3300は14層と接合	石鏃38、印石461
北壁23層	褐色シルト質土	1093、3036、3027、3451、 3585		石鏃115
北壁24層	褐色粘質土	3462		石鏃82
北壁25層	褐色土			
北壁26層	褐色砂質土			
北壁27層	暗褐色土、炭化物少量	3580		石鏃4、54
北壁28層	暗褐色土	3046、3719	3046は23層と接合	石鏃181、305
北壁29層	褐色砂質土	3261		石鏃529
北壁30層	褐色砂質土	3758		石鏃363
北壁31層	褐色砂質土	3196、3251、3312、3642、 3706	3842は18層と接合	
北壁32層	灰褐色砂質土			
北壁33層	褐色砂質土	1066、1122、3010、3019、 3024、3028、3045、3046、 3071、3153、2203、3269、 3402、3408、3455、3483、 3619、3772	3046は28層、3402は西壁75層、 3455は47層と接合	石鏃37、61、123、138、200、 218、239、264、未058、剥片 432、石錐509、518、521
北壁34層	灰褐色砂質土			
北壁35層	黃褐色シルト質土	1612、1147、3050、3163、 3273、3675	3163は60層、3273は28層、47層と 接合	石鏃87、101、157、162、186、 石錐354、梯形石磬378、石錐441
北壁36層	褐色土			

第Ⅱ章 1区調査成果

試掘区層名	土層觀察	出土土器No.	土器複合関係	出土石器%
北壁37層	褐色土			
北壁38層	暗褐色土			
北壁39層	褐色土			
北壁40層	褐色土	1061, 3115		
北壁41層	暗褐色粘質土			
北壁42層	褐色シルト質土			
北壁43層	褐色シルト質土			
北壁44層	褐色シルト質土			
北壁45層	暗褐色土	3629		
北壁46層	暗褐色粘質土			
北壁47層	褐色土	3273, 3309, 3455, 3535	3273は28層・33層、3309は19層、3455は33層と複合	
北壁48層	褐色土	3318, 3219, 2465, 3493, 3571	3219は50層と複合	
北壁49層	暗褐色シルト質土			
北壁50層	褐色シルト質土	3494		
北壁51層	暗褐色土			
北壁52層	褐色シルト質土			
北壁53層	褐色土・砂質まじり			
北壁54層	暗褐色土			
北壁55層	褐色粘質土			
北壁56層	暗褐色土・混物・炭化物多い	3108		
北壁57層	褐色土・砂混じり			
北壁58層	褐色シルト質土			
北壁59層	黃褐色砂質土	1124, 3022, 3064, 3219	3219は40層と複合	石器13, 116, 134, 173
北壁60層	褐色砂質土	1013, 3163, 3200	3163は35層と複合	石器33, 39, 横形石器385, 石錐519
北壁61層	黃褐色砂質土			
北壁62層	灰褐色砂質土			
西壁5層	暗褐色土・炭化物多い	3445		
西壁13層	暗褐色土	3074		
西壁63層	暗褐色土・炭化物多い			
西壁64層	褐色シルト質土			
西壁65層	暗褐色土			
西壁66層	暗褐色土			
西壁67層	褐色シルト質土			
西壁68層	暗褐色土			
西壁69層	褐色土			
西壁70層	褐色シルト質土			
西壁71層	暗褐色土			
西壁72層	暗褐色土			
西壁73層	褐色シルト質土			
西壁74層	褐色砂層			
西壁75層	暗褐色砂質土・混物多 い・礫混入	3173, 3279, 3402, 3695	3402は30層と複合	石器126
西壁76層	褐色砂質土			
西壁77層	褐色土・泥砂層			
西壁78層	灰褐色砂質・混褐色土			

※出土石器の羽の「未」は未発表の意味である。

層名	出土遺物	層名	出土遺物
1		6	
2			
3			
4			
5		7	
		8	

第14図 拡張区層位別出土遺物（1）東組尺不同

層名	出土遺物	層名	出土遺物
10		14	
12		17	
12 · 13		18	
13		19	
		20	
		21	
		22	

第15図 拡張区層位別出土遺物(2)

層名	出土遺物						
23							
24							
27							
28							
29							
30							
31							
33							

第16図 拡張区層位別出土遺物 (3)

層名	出土遺物	層名	出土遺物
35		50	
38		55	
40		56	
45		59	
47		60	
48		西壁 5	
		西壁 13	
		西壁 75	

第17図 拡張区層位別出土遺物（4）